

|                  |                                                                                                                                                                                                                   |
|------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 稲荷社祀官大西親盛の和歌：東丸神社蔵『松葉集』解題と翻印                                                                                                                                                                                      |
| Sub Title        | A study on Waka poetry of Onishi Chikamori, a Shinto priest of Fushimi Inari Shrine in the middle Edo period : research and reprint of Matsubasyu in Azumamaro Shrine collection                                  |
| Author           | 一戸, 渉(Ichinohe, Wataru)                                                                                                                                                                                           |
| Publisher        | 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫                                                                                                                                                                                                   |
| Publication year | 2018                                                                                                                                                                                                              |
| Jtitle           | 斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.53 (2018. ) ,p.97- 165                                                                                                                                         |
| JaLC DOI         |                                                                                                                                                                                                                   |
| Abstract         |                                                                                                                                                                                                                   |
| Notes            |                                                                                                                                                                                                                   |
| Genre            | Departmental Bulletin Paper                                                                                                                                                                                       |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20190228-0097">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20190228-0097</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 稲荷社祀官大西親盛の和歌

—東丸神社蔵『松葉集』解題と翻印—

一 戸 渉

はじめに

でも有益なものと考えられる。以てここに紹介を試みる所以である。

## 『松葉集』解題

本稿は稲荷社祀官にして非藏人を兼ね、また荷田春満及び冷泉為久・為村門の和学者・歌人であつた大西親盛（一七〇三—一七七八）の歌文稿『松葉集』の解題と翻印である。該書は東丸神社所蔵の東羽倉家文書中より見出されたもので、全文は学

まず、当該資料の書誌を略記する。

界未紹介のもの。元文三年（一七三八）から明和二年（一七六五）にかけ、二十八年もの長期に亘る稲荷社神主家たる大西家当主の文芸活動を窺い得る好資料であり、また詞書等に見える多数の人名は、当該時期における親盛周辺の人的交流を窺う上

東丸神社蔵。（大西親盛）撰。（江戸中期）（大西親盛）写。半紙本二冊。仮綴装。二三・二×一七・一糎。楮紙。共紙表紙。外題「松葉集・第一（第二）」（中央・打付書）。内題「元文三年以来愚詠之留」。印記ナシ。整理番号A・二・一九三—一九四。文書番号七〇三・七〇四。

奥書や識語の類を欠くものの、内容及び筆跡から、稻荷社祀官にして非蔵人を兼務していた大西親盛が、自詠及び知友との詩歌の贈答を年次を追って収録した歌文稿と見て間違いない。著者の親盛に関しては、近時、松本久史氏により京都における荷田春満（一六六九～一七三六）の祝詞研究の継承者としての側面に光が当てられており、また稿者自身も春満没後における当該学統の帰趨を追う中で若干の言及を試みたことがある<sup>32</sup>。

ところで、親盛の和学者・歌人としての活動は、稻荷社祀官、また非蔵人としての職務の傍らに行われたものである。よってまずは彼の稻荷社祀官としての側面について整理しておこう。親盛は、元禄十六年（一七〇三）に安田親夏の子として生まれ、のちに大西親友の養子となつて稻荷社神主家の大西家を継いでいる。稻荷祀官としての履歴は以下の通りである<sup>33</sup>。

|             |         |
|-------------|---------|
| 享保九年三月一日    | 任田中社祝   |
| 享保十五年六月二十六日 | 任相模守上社祝 |
| 享保十六年       | 任上社禰宜   |
| 享保十七年       | 任中社禰宜   |
| 享保十九年       | 任下社禰宜   |
| 延享元年        | 任権祝     |

|            |       |
|------------|-------|
| 延享二年       | 任権禰宜  |
| 宝暦元年       | 任正祝   |
| 宝暦二年三月十六日  | 任正禰宜  |
| 同年四月五日     | 任上社神主 |
| 宝暦五年三月十二日  | 任中社神主 |
| 宝暦十一年十二月三日 | 任下社神主 |

以後、安永七年（一七七八）七月十一日に七十六歳で没する直前まで、彼は下社神主職にあった。

続いて非蔵人としての親盛について記す。そもそも近世における非蔵人は慶長十一年、後陽成天皇が再興したことに始まり、大西本家では親盛より四代前の親修の時代より、代々その職にあたることとなつていたようである。文政年間頃の成立と思しい東九神社蔵『非蔵人家伝』（文書番号二二三四～五）の親盛条の全文を以下に引く。

|                           |                                |
|---------------------------|--------------------------------|
| 隠岐秦親友男実稻荷社故社務正四位下安芸守秦親夏三男 |                                |
| 享保十四年六月十一日                | 出仕 <sup>二十七歳</sup> 内非蔵人見習      |
| 十六年三月二十七日                 | 為父番代                           |
| 十八年十一月十八日                 | 内侍所御櫓之年櫓御覧運送御用 <sup>（補力）</sup> |

延享三年三月廿三日 参 儲君

四年五月二日御受禪之日参 内御詰

為定時元永書

寛延四年後六月二十五日 家督相統祿御蔵米拾五石三人扶持

宝暦元年十一月二十八日 小番五年勘定不欠御褒美

三年二月十三日 以男親臣為番代

十年九月二十四日被 仰出十二月十五日趣東武

十一年二月九日 帰京

安永二年三月十日以親臣為相統

七年七月十一日 死 七十六歳

親盛が若年より和学を修し、和歌の修練を欠かすことがなかったのも、右記したとき神官・非藏人という職に相応しい教養としてのものであっただろうが、ただ同時代の同階層の人々と比べてやや特殊と言えるのは、彼が晩年の春満の有力な門人の一人であつた点にある。松本久史氏の指摘する通り、親盛と春満との学問上の接点は、現存資料中では享保五年四月二十三日より始まる春満の『古今和歌集』講義を書き留めた『古今和歌集聞書』（『新編荷田春満全集』第六卷所収）が最も早い。<sup>4</sup> 恐らく親盛は享保元年の春満帰京後、その講筵に連なつたものと見える。

ところで、ここに紹介する『松葉集』は冒頭に「元文三年以来愚詠之留」とあり、春満が没した翌々年である元文三年以降の詠歌が収録されている。先述の通り親盛は十代後半から三代前半にかけて、春満の指導のもとで神典・歌書を読み、詠歌の修練を続けていたわけであるが、だとすればなぜ本書において「元文三年以来」といった区切りが置かれているのであろうか。そもそも外題として「松葉集」と、和歌集に相応しい題が与えられている点からも、本書は単なる書留めの類ではなく、親盛が一定の意図に基づいて編纂したものと見るべきで、元文三年という年は彼にとって何らかの特別な意味を持っていたことを窺わせる。

このことを考える上での手掛かりとなるように思われるのが、本書の元文四年条以降に認められる冷泉家との数多の接点である。元文五年秋時点での冷泉為久の門人一覧と見しい『冷泉門人』<sup>5</sup>に「稲荷社 大西相模守 親盛」とあり、またこの『松葉集』の内容から、親盛が和歌を家職とする冷泉家に入門していたことは間違いない。ただし正確な入門時期について知り得る資料を欠く。生前の春満から和歌の指導を受けていた期間には、親盛が冷泉家と和歌の上で接点を持っていた形跡が今のところ

見当たらず、また春満自身が堂上歌学とは敢えて距離を置いていたことに鑑みて、春満の生前に親盛が冷泉家に入門していたとは考えにくい。以上を勘案すれば、師である春満を失った二年後の元文三年に親盛が冷泉為久に入門した可能性は高く、となれば、恐らくこの『松葉集』は冷泉派歌人としてのキャリアを新たに歩み始めて以降の自詠を収録したものと考えられる。

近世期の冷泉派歌壇に関しては久保田啓一氏による一連の研究があるものの、親盛のような上方における杜家の冷泉家門人については従来十分な論及がなされているとは言い難い。『松葉集』の資料的意義は、まずもって大西親盛を軸とした人的ネットワークを解明する上で種々の手掛かりとなる点にあるが、同時に従来の研究ではほとんど知られていなかった京都の杜家における冷泉派歌壇（更に言えば旧荷田春満門）の動向を窺いうる、近世中期歌壇史研究上の有益な資料である点にあるだろう。以下、本書に見える主要な人名について、箇条書き的に注解を加えておく。

【松田道格】寛保元年条参照。松田道格は後述のごとく野宮定基及び今井似閑門の京の医師。寛保元年の時点で六十歳ということは天和二年（一六八二）の生まれ。広く知られた人物では

ないため、若干考証を加えておく。野宮定基との接点についてであるが、新井白石と野宮定基との問答である『新野問答』の正徳二年荒川元英奥書によって同書の成立に松田道格が関与したことが分かる。野宮定基の『平家物語考証』巻頭に名が見える「洛陽後学源道格集」もこの松田道格のことと見て間違いないだろう。今井似閑との関係については、山口県立山口図書館所蔵今井似閑旧蔵本中の豊原統秋『體源抄』に「此體源抄二十巻者以高橋源之丞本荷松田道格恩惠書写令比校畢書生誤謬繁多而難読解数多可嘆焉又所々至無用舞樂事省略而已」于時宝永七庚寅十一月十二日洛東隠士」との似閑奥書があり、同書は似閑が道格に書写させたものと分かる。<sup>(8)</sup> また似閑編『万葉緯』（享保二年跋）巻十九に「松田氏曰」「松田道格曰」等と道格説が引かれている。ちなみに『通兄公記』寛延四年六月一日条に「午斜向医師道格宅」とあるのも同人であろう。<sup>(9)</sup> 六十賀に際して一首を贈った相手という程度で親盛との親疎の度合いは未詳ながら、契沖の高弟であった今井似閑の門人と、旧春満門下の親盛との接点が認められたことは、古学の学統を考える上ではいささか興味深い。

【羽倉東之進】寛保二年条参照。荷田春満の養子、荷田在満の

こと。

【松平備後守】寛保二年条参照。幕臣の松平権之助信允（信綿・信富）のこと。旧荷田春満門。

【嶺南先生】寛延元年・同二年条参照。寛延元年条ではこの「嶺南先生」なる人物が「桂華詩箭」という書物を親盛の息親臣へと贈ったとあるが、蘆庵文庫所蔵の『桂華詩箋』は嶺南門人の漢詩撰集の写本であり、両者の関係を見合わせる。<sup>(1)</sup> 蘆庵文庫蔵本は写本だが同書に備わる寛延二年の大垣の釈天海の序文を読む限り板本を写したもののようで、元の板本の現存を確認し得ない今となつては、当該転写本も一定の価値を有する。さて該書は巻頭に「秦親臣子禮 輯／荷田信要元齡 校」とあり、編輯者として大西親臣の名が見え、また校訂者の荷田信要は恐らく松尾相共の次男として生まれ、羽倉信舎の養子となつて祀官及び非蔵人を務めていたが寛延三年に突如職を辞して出奔したという羽倉延要のことと見られる。同書には同じく稲荷社杜家の毛利公英（同書中では「秦子春 名公英」と表記）や、『松葉集』にも登場する地下官人の藤野井（春原）忠韶（同書中では「春原雅卿 名忠韶」と表記）などの漢詩も収録されており、この「嶺南先生」は当該時期に杜家や地下官人の間に一定数の門人

を獲得していた漢詩人のようである。この時期に「嶺南」号を用いた漢学者で、在京であつたと思しい人物としては荻生徂徠門で後に安房勝山藩儒となつた木村蓬萊がいるが、確証を得ない。後考を俟つ。

【菅原正代】寛延二年条参照。北野社杜家の吉見家出身の非蔵人。彼は吉田神道批判の論陣を張つていた吉見幸和の門人であつたことが、幸和の編著『国学弁疑』巻三「神漏岐神漏美弁」の延享三年の年紀ある奥書の「恭軒門人 菅原朝臣正代」との署名から判明する（東京大学宗教学研究室蔵本参照）。『松葉集』寛延四年（宝暦元年・一七四七）条より、吉見幸和八十賀に際し、その息である幸混の勸進に応じて親盛が和歌を詠じた事実も確認され、吉見幸和及びその門弟と親盛ら稲荷社家との接点を確認された形である。

【妻木貞彦】宝暦五年条参照。名を成彦ともいい、徳島藩士にして小笠原定世門の和学者である。貞彦の著作『拔櫟録』（現存未詳）を羽倉信郷を介して披見した親盛は、その内容にいく感銘したらしい。貞彦と親盛ないし信郷とが直接の接点を持つていたかは、『松葉集』の詞書のみからは判断しかねる。なお、妻木貞彦なる人物は菊川兼男氏の研究によれば、洲本の

地において儒仏を排した苛烈な古道論を説いていたごとくであり、宝暦八年には恒道・恒明と共に藩政批判の廉で追放処分にされたのだという<sup>(13)</sup>。ちなみに管見に及んだ貞彦著『和漢親疎』（延享四年成）は太宰春台『弁道書』を逐条的に批判した書で、仲野安雄序及び延享四年の自序、同年夏の恒道跋があり、儒仏渡来以前のおのずからなる日本の道の存在を主張するものである<sup>(14)</sup>。

【岡嶋信夫】 宝暦六年条参照。唐話学者岡嶋冠山の息子岡嶋竹塙のこと。親盛と岡嶋冠山の息子との接点はやや意外に思われるかも知れないが、享保八年十二月十七日付と推定される荷田春満宛芝崎好安書状（東丸神社蔵）に、「岡嶋氏も未貴亭二寄宿故毎夜文字訳文之会も被成候而、愚息（芝崎好寛・論者注）致出席候旨致大悦候」とあり、冠山が京の春満宅にて「文字訳文之会」を開いていた事実が確認できる<sup>(15)</sup>。この『松葉集』の詞書からも、親盛と竹塙とは久方ぶりの対面であったようであるから、恐らく春満存命中に冠山を通じて両者には何らかの交流があったものと推定される。

【下村菊軒】 宝暦十年条参照。松本為以の勸進で下村菊軒なる人物の十七回の追悼歌を詠じている。逆算して延享元年（一七

四四）六月十九日に没した当該人物であるが、荷田在満『百人一首解』の文屋康秀歌の注解の中で参照されている「古写の古今六帖」は「下村菊軒所蔵」とされており（『荷田全集』第七卷五九四頁）、真淵『百人一首古説』の康秀条でも「わが友菊軒といふ人京に侍るが」云々とあり（続群書類従完成会版『賀茂真淵全集』第十二卷一九四頁）、在満及び真淵とも相識で、彼の所持していた『古今和歌六帖』古写本が春満の門流間で参照されていた形跡が認められる。

【賀茂真淵】 宝暦十三年五月条参照。真淵はこの年に大和方面への旅行を行っており、その旅中に宣長との会見に及んだことは周知の通りである。ただ、真淵は京へも立ち寄っており、旧知であった親盛とも対面していたことが本書より判明する。在京中の真淵が訪問してこないことを親盛が咎めた一首、春満の墓とかつての住居跡を訪れたことを真淵より聞き及んだ折の三首が収録されているが、この折、真淵は土産として親盛へ源実朝の家集『金槐和歌集』の書入本を贈っている。広島大学蔵『金槐和歌集』はその転写本であり、「右金槐和歌集三帖賀茂真淵今度上京為土産代預惠贈旧友之志情難忘於序者彼翁自筆也伝不朽而須為家物也／宝暦十三年四月 稻荷社務秦親盛（花押）」

との親盛識語を有する<sup>(16)</sup>。なお、親盛が譲り受けた真淵自筆の序文と書人のある原本は現在國學院大學の蔵に帰している。

以下、上記した以外の人名について、登場順に姓等を補った上で分類整理して掲げておく。各人の職・別称等について（）内に適宜注記した。<sup>(17)</sup>

〈公家〉冷泉為久・冷泉為村・平松時行・大原重度・広橋兼胤・飛鳥井雅香

〈稻荷社神官〉安田親冬（中社神主）・安田親教（中社神主）・大西親栄（中社神主・東大西家）・大西親定（上社神主・東大西家）・家父三位（大西親友・下社神主）・荷田信名（御殿預）・松本筑後守（為勝）・祓川佐渡守（親茂・正祢宜・非藏人）・羽倉出羽守（信舍・目代・非藏人）・大西下総守（親方・上社神主・松本和泉守（高任・中社神主・非藏人）・松本甲斐守（為以・正祢宜・非藏人）・羽倉撰津守（信郷・御殿預）・大西親業（上社神主・非藏人・親方養子・実父は親盛）・祓川直親（上社神主・非藏人）・菅満（後の大西親寓・中社神主・非藏人）・羽倉信里（氏人・非藏人）・羽倉伯耆守（信之・目代・非

藏人）・毛利豊後守（公林・中社神主・非藏人）・松本為慶（田中社祝・非藏人）

〈地下官人〉春原成光（藤野井姓・非藏人・院藏人）・保田忠辰（一条家諸大夫・佐々盛量（非藏人）・春原成允（藤野井姓・上北面）・大江俊包（藏人）・大江俊民（藏人）・武田晴方（院藏人）・鳥居小路法院（經州力・青連院宮坊官）・入江則信（一条家諸大夫）・松室救重（非藏人・祓川親芳次男）・松室重周（非藏人）・春原正逸（上北面）・春原正福（赤塚姓・非藏人・称丹後・前名忠貞・正逸息）・松室重殖（非藏人）・牧義備（鷹司家諸大夫・藤野井石見（非藏人・院藏人・藤嶋忠韶・鳥居小路經雄（青連院宮坊官）・松室重道（非藏人）・松室重勝（非藏人）・松尾相連（非藏人・上北面）・菅原正名（吉見姓・別名正副・非藏人）・安田親安（非藏人・下社神主・橘毘經（橘本姓・非藏人）・松一瓢（松尾相在・非藏人・称筑後）・松尾日向（相春・非藏人）・保田大膳権亮（保田敬忠・一条家諸大夫・岩橋出羽（元古・非藏人）・武田徹叟（武田晴親・院藏人）・細川常芳（院藏人）・入江則明（一条家諸大夫）・祐益卿（中臣姓・春日社祀官）・橋本亮常（非藏人）・秦重茂（松室姓・非藏人）

〈地方神官〉遠州浜松諏訪社法楽神官友満（杉浦姓力）・平治

胤（根本姓・上総国菊間八幡宮神官）・筑前国直方なる物部の老翁（青山敏文・多賀社祀官）・吉見左京大夫（幸和・名古屋東照宮祀官）・吉見幸混（名古屋東照宮祀官）

〔未詳〕重厚・はたの親みち・三品宗永・鴨光篤（鴨脚姓力）・六波羅なる樋口の翁・松尾重篤・松室見山・秦善長・維嶽・飯田の何かし・河崎洞鶴・野村勘解由源保尹

〔その他〕羽倉左中信満（信郷実父・初名並河宗基）

以上を総合するに、歌人としての親盛の交友圏には春満の生前に築かれていたものを継承した部分と、また冷泉家との繋がりなど春満没後に新たに獲得していった部分とが認められる。

冷泉為村門の梨木祐為の勧進で明和七年（一七七〇）十月十三日に開催された鴨長明没後五五五回の歌会の記録が稿者の手許にあるが、そこには澄覚（冷泉為村）・油小路隆前・冷泉為榮といった公卿及び賀茂社の社家の面々に加えて、大西親盛・大西親臣・鳥居南公任（高任）といった稲荷の秦氏系の社家の人々の名が並んでいる。親盛は息の親臣ともども冷泉家より和歌の指導を受けており、かなり熱心な門人の一人であったようである。また親族など血縁上の繋がりのある人々、非藏人や祀官とし

ての職務上の繋がりを有する人々との和歌を通じた遣り取りの多さも特徴的である。血縁関係について補足しておけば、登場頻度の高い春原姓の人々は、多くが非藏人として共に禁裏に出仕する同僚であることに加え、稲荷社の秦系の社家と血縁上の繋がりが多々認められる点に注意される。例えば春原成允の実父は祓川親芳、すなわち西大西家の別家である祓川家から出た人物であり、またこの親芳もとは菱妻社神主源東光の息で、後に祓川親賀の猶子となった人である——そもそも親盛自身が

祓川家の分家である安田家から西大西家に養子に入っている。

また西大西家の親宣の養子となった親成は、もとは新日吉社社家の藤野井（春原）家の出で、後に藤島氏と改め、新日吉社の祀官（非藏人を兼務）となっている。このように畿内の社家の間において縁戚関係が盛んに結ばれたのはもちろん階級的な同質性ゆえのことであろうが、和歌という社交の具がそうした関係の密接さを追認する上で果たしていた役割を見過してはならない。

非藏人との関わりで言えば、寛延三年条の「於小番所詰合之朋輩密々稽古当座」とある三首は、非藏人の詰所において、職務の合間に密に行われていた和歌稽古会の存在を示唆してお

り興味深い。近世の非藏人に関する記録や文書の類は少なからぬ量が伝存しているが、このように隠れてこっそりと行われていた歌会などは、その性格上、公的な記録には決して書き留められることはなからう。非藏人の実態を理解する上では、こうした文芸資料もまた活用之余地の大きいものといわねばなるまい。ちなみに宝暦十年条において、七月二日に春満二十五回を紀年して詠まれた和歌三十一首は、『春葉集』所収の春満歌「草も木もけさよりいろのかはるやと思ひ初るよあきのはつしほ」(題「立秋」)の各音を冠に置いたものである。

#### 注

- (1) 松本久史「荷田派の延喜式祝詞研究―稲荷祀官大西親盛を起点にして―」(『朱』第五八号、二〇一五)。
- (2) 拙稿「羽倉風のゆくえ」(『朱』第五五号、二〇一一)、「和歌の万葉書」(『斯道文庫論集』第五〇輯、二〇一六)。なおこの二つの拙稿では『松葉集』に論及しているが限定的な紹介に留まる。
- (3) 伏見稲荷大社編『伏見稲荷大社年表』(伏見稲荷大社御鎮座一千二百五十年大祭奉祝記念奉賛会、一九六二)に拠つ

た。

- (4) 注1前掲論文。なお、春満門人時代の親盛の和歌については『新編荷田春満全集』第十二巻所収の歌会資料を参照されたい。

- (5) 大阪市立大学学術情報総合センター森文庫所蔵。巻末に「右元文五年秋改」とあり。国文学研究資料館紙焼写真にて披見(N一四六九)。

- (6) 元禄十三年十一月十日付羽倉駿河守宛書簡。『神道大系復古神道(二) 荷田春満』二二―四六頁参照。

- (7) 久保田啓一『近世冷泉派歌壇の研究』(翰林書房、二〇〇三)など。

- (8) 原本未見。国文学研究資料館の日本古典資料調査データベースに拠った。

- (9) 吉澤義則編『未刊国文古註釈大系』第三冊(帝国教育会出版部、一九三九)六八六頁等。

- (10) 史料纂集古記録編一四二『通兄公記』第十(八木書店、二〇〇五)七〇頁。

- (11) 国文学研究資料館マイクロフィルム(三二六・一二・五)にて披見。なお、同書には「春原忠韶」との印記がある。

(12) 羽倉延要については、羽倉敬尚編『稻荷社家系図』（鈴木淳編『近世学芸論考―羽倉敬尚論文集―』明治書院、一九九二、所収）中の西羽倉家系図参照。

(13) 菊川兼男「享保・宝暦期の淡路の学者とその思想」（『兵庫史學』第二九・三〇号、一九六二）参照。

(14) 東京大学国文学研究室本居文庫蔵本参照。国文学研究資料館マイクロフィルム四六一四八一〇にて披見。

(15) 科研費成果報告書『近世国学の展開と荷田春満の史料的研究』（二〇〇七）所収「史料荷田春満宛書状」書状番号一一。

(16) 山本饒編『稿本賀茂真淵全集』思想篇下（弘文堂、一九四二）四三八頁参照。

(17) 稻荷社の祀官については羽倉敬尚編『稻荷社家系図』（注12前掲）、地下官人及び非蔵人に關しては『地下家伝』（日本古典全集刊行会、一九三八）及び前掲の東丸神社蔵『非蔵人家伝』を主として参照した。

(18) 架蔵。梨木祐為筆。卷子装一軸。該書について機会を改めて紹介に及びたい。

## 『松葉集』翻印

〔凡例〕翻印にあたっては、以下のように処理を加えた。

- 1、漢字は、原則として通行の字体に改めた。
- 2、変体仮名は、現行の仮名に改めた。
- 3、おどり字は、原則として漢字は「々」、仮名は「ゝ」「ゎ」「ゐ」を用いた。
- 4、明らかな誤字、脱字や衍字等は、適宜、右傍に（ママ）などと注記した。
- 5、通読の便宜を考慮し、和歌を除いて読点を付した。
- 6、虫損・破損等で判読の困難な箇所はその文字数分の□で示したが、文字が推定可能な場合は（ ）に括って傍記した。
- 7、抹消・見せ消ちは当該字句を【 】で括り、訂正字句のある場合はそれに続けて（ ）で括って示した。
- 8、和歌の歌題・詞書は和歌の行頭より二字下げに統一して記した。ただし、第二冊の紀行文中の和歌は、原文通り行頭より一字下げで記した。

9、その他、校注者による注記は、すべて「」内に記した。

元文三年以来愚詠之留

二月下旬賀家父之七十通題

松契千年

親盛

かきあつめ見るも尽せし老のへん千年を松に契る言のは

同組題十首之内一首

杜頭祝

曇りなき代々に伝へていなり山たえぬ光りをみつのとし火

夏草滋

花に見ん秋もまかし露ふかく猶生しけれ庭の夏草

螢火透簾

軒ちかき木の間の月にさきたちてこすのほたるのかけそほの

□□  
(めく)

五月十九日舞楽御覧の時、雨いたうふり出ければ

かしこしな恵みあまねくふる雨の露にうるをふ舞人の袖

歳暮

あたにのみ過し月日の悔しさも暮行としの名残にそおも□□  
(ふか)

同四年

歳旦

今朝はまつ春たつ色を見つかきやいなりの山そ霞そめける

春原成光之母七十賀勸進

鶴千年友

此宿に千代をかさねて友と見ん松にきなる、鶴の毛衣

都春曙

名にしおふ都の空は月花のひかりにしらむはるのあけほの

梅有遅速

浮る、もよしや園ふの梅の花ほかのさかりにあらそはて見む

遠州浜松諏訪社法楽神官友満勸進二首

春月

あふけ尚かすめる春の月かけもおほろけならぬあけの神垣

寄山恋

へたてなき道を契りて妹とせの山といふ名を例にやせん

冷泉家伝授の箱、大納言為久卿開覧勸許ありけるを賀しま

つりて

濁なく代々につたへてこの家のなかれつきせぬ水くきの跡

保田大膳亮忠辰人丸御影供勸進

寄道祝

あふけ猶ひとりあゆみし跡たえず世々に榮る敷島の道

於佐々土左盛量亭会詠二首

鵜河

大井川月になる夜はうかひ船あらしの山のかけめくるらん

祈恋

哀とは神そしるらん祈置恋路にまよふ人の心を

一條家御内々御会

菊契週年

仙人のかさしをけふのためしにそ契るも久し千世のしら菊

於佐々土州亭会

菊露

幾秋を花に契りて千世ふへき菊のまかきに置るしら露

松残雪 当座

春さぬとかすむやいつこしら雪のまた消あへぬ峰の松原

花 同

色も香もかすみにこめてよしの山花よりしらむあけほの、空

同五年

於佐々土州亭会

花色春久

けふは猶あかぬ心の色そへて花に幾世の春や契らん

二月初午禰宜祝等かねてたえたるをつき、すたれたるおこ

さんと 奏し侍りてけふの神事に始て位袍を着てつかふま

つりぬ、やつかれも其つらにあつかり仕ふまつりて読侍る

紫もあけも色そふ神垣に君の恵みの袖そつらなる

初午まうてを見て人々哥よみてよめといひ入れれば

二月やいなりの山のすきかてに猶ゆふかけてあそふ諸人

稽古会二首

野雲雀

き、す鳴末野の原に立ひはりなれも妻をや空にこふらん

春旅

旅ころもたちこし花の都そと霞へたて、したふ山端

藤野井遠江春原成允母七十賀勸進

春竹契久

幾春の契りをこめて鶯もねくらしむへき庭の呉竹

稽古会 二首

卯花

暮そむる月の光りを白妙の籬に見せて咲るうの花

寄風恋

秋になる人の心の山風にわか恋くさそ吹しほれぬる

同 二首并当座二首

待郭公

つれなさを月にかこちて時鳥まつ夜更行在明の空

寄草恋

かれす尚祈るかひあれ神山のあふひてふ名をたのみにして

五月雨

八重葎猶雲霧にとちはて、心もはれぬ五月雨の比

夜風似雨

ともすれは雨にそまかふ小夜風に竹の葉末の窓を打音

後七月十八日於佐々土州亭稽古会

女郎花随風

ひとかたになひくとはなき女郎花風の心にいつまかせけん

秋野月 当座

秋はきの花野に置く露ことにひかりをそへて月そやとれる

惜月 同

惜とおもふ心にしはしとまらなにかたむくかたの山端の月

旅宿鴈 同

露ふかき草の枕に鴈かねもたひの哀をそへてなくらん

八月十五夜於佐々土州亭会

中秋月

あふけ猶もろこしまても名に高き月の最中の秋つ洲の秋

御霊社法楽冷泉家勸進

盛花

八重桜枝やいつれと埋まて咲そふ花の色そこふかき

柿本社法楽冷泉家勸進

萩の下葉も

秋はきの下葉もいまや妻こふる鹿のおもひの色に染けん

九十賀重厚勸進

対松争齡

此宿にまつこそ千世の友ならめ春に色そふ陰をならへて

今年八月二十日為京極中納言定家卿五百回忌追遠冷泉家勸進

月前言志

松たかき小倉のやまの月かけにしらぬむかしの秋をしそおもふ

同六年

二月五日冷泉会始

寄子日祝

引つれて祝ふ初子に此家のさかへを契る松の言の葉

八幡宮之神子八十賀勸進

松延齡友

八幡やまなれこし友と末遠きよはひを契る峰の松か枝

春日社法楽冷泉家勸進

増恋

春日野の雪間の草の日にそへて我下もえの色やみすらん

寛保元年三月八日当所之村民欲執薪登于当山而到三峯之辺  
有崩所従其土中得八花形鏡婦予図其鏡作歌并序為一卷

大よそ鏡のそのかたちまとかにして物をてらしあきらかな  
る事あたかも日月の光りうるはしきかことく妙なるものな  
り、世の中にある人の調度の中にそのよしあしをうつして  
すかたをたゝすは鏡よりおもき器は侍らさりけり、かれ天  
地のひらけはしまりける時、ますみのかゝみの名はおこり  
て世に伝はる事はかけまくもかしこきやたの鏡なりけり、  
されと夫は天津御しるしにておほけなく世のためしに引出  
んは恐れおほかるなれと、只鏡のたうときことほりをのへ  
侍るのみなり、爰にやつかれか仕ふまつれる稲荷の太神は  
その始しつまりましませし三峰のほとりに崩たるところあ  
り、今年寛保元年春三月八日、たき木をおへるのことも

の中に彼くつれたる土中に物ありと見ゆるをとり出ければ  
世にめなれぬ物にて、それともしれる人侍らさるよし、や  
つかれか本へ告げるを聞て、それを求め出て見ければ、八  
花形に造れる鏡なりけり、誠に幾世ふりぬるものにや神さ  
ひて裏かたなどさたかには見え侍らねと、たなひく雲にか  
けり舞ふ鳥獸、から草などちりはめたるさまにぞ見えける、  
かねてふるき鏡のかたあまた見侍る中に海馬狻猊あるは海  
獸蒲萄鑑といふあり、大かたこれらのたくひに似かよひて、  
神の御しるし物とは見え侍らねと、なへて世の人の上にた  
に身のまもりとておろそかにはもてなし侍らぬに、まして  
吾太神たちのましませし山より出たるものをなをさりにな  
し置んは、神つかさたるものゝ心にはあらさるへし、思ふ  
にそのかみいつれの御時にか納め給ひけん神宝にてある事  
を、浪風の静ならさりしころ土をうかちてかくし置けんを、  
時うつり世かはりて埋木の人しれす有けん、今時いたりて  
あらはれしは曇りなき世のひかりにそありける、むかしよ  
りかゝることのめてたきためしも世に聞え侍れは、まことに  
神のあらはし給へる瑞なる事とて、神つかささらかの取出  
したるものゝ、いたはりをほめてたまものし侍りぬ、其鏡は

神たからとして持ゆまつり、いはひをさめて呉竹の世々絶  
す、まさきのかつらなく伝はり、しるしの杉の常磐かき  
はに御世をいはひ、さ、れ石の岩ほとなる心のよろこひを  
そしるし侍る

下社禰宜秦親盛

稲荷やまか、みのかけも照そひて猶くもらしなみつのもし火  
稽古会

風静花芳

花の上にとふならひの忘られて吹も長閑に匂ふ春風

海辺霞

長閑しな浪も霞の色そへてみるめ言なる浦の曙

里竹

馴ても竹の葉山を吹風【に】（の）音そ淋しき深草の里

五十賀或人以保田大膳亮勸進

新竹

千世幾世千尋のかけや契らんことし生そふ庭の若竹

八幡宮法楽冷泉家勸進

杜紅葉

露霜の染なす色もわきて尚秋のけしきの杜の紅葉は

医師松田道格六十賀勸進

寄松祝

幾千世も栄えん宿はとし高き松のみさほの陰に杜しれ

稽古会 二首并当座三首

聞郭公

それとしも思ひもあへす時鳥聞やもらさんいまの一声

神祇

稲荷やま猶いやましに君か世の光りをそへよみつのもし火

夏風

なつ木立青葉の風も匂はなんさそひし【風】（花）の名残と、  
めて

夏草

夏ふかき草の中にもわきて尚置ける露の撫子の花

萩告秋

今朝は先くるてふ秋の音たて、そよくもしるし萩の上風

夏月涼

夏の夜は霧も霞もなか空に影さやかなる月の涼しさ

山家雨

静けしな山の庵の雨の夜はあらしの松の音もしめりて

春  
春日野 当座

いつしかに雪間の若葉もえ出る春の光りの春日野の原

夏  
難波江 同

難波かた入江の浪のよるくにあしへ涼しく螢飛かけ

祇園社法楽冷泉家勸進

除夜

おもふそよ夢と過こし春秋もこよひ一夜のとしの名残を

稽古会当座二首

野月露深

秋ふかく野辺の草葉に置露の光りをそへて月そやとれる

嶺雲

山あひにおりしつむかと見るか内に又立なひく峯のしら雲

同会二首

湖上月明

曇りなき鏡の山の月影をうつしてそ見る志賀の浦波

蒼苔満山径

生そふる山路の苔の色深みおなしみとりの松の木かけに

冷泉大納言為久卿身まかり給ふ時もとふらひて

秋ふかきなけ<sup>(き)</sup>□をさそと思ふ身の袖も涙の露にしほれぬ

したふそよ我言の葉の末はまて恵みをかけし露の名残を

非蔵人にて仕へ侍る時、九月十三夜御会ありて御人数の御

子たちかんたちめ上ひとなとまいり、つとはせ給ふを見て

冷泉古大納言とのおはしませはまいり給はんなどおもひ

つ、宿直し侍りければ、雨いたうふり出て今宵の空も名の

みなりければおもひよせて読侍る

今宵尚したふ涙もふりそふや晴ぬなかめの長月の空

寛保二年

稽古会始

松契週年

移し植て契るも久し幾千年春に色そふ庭の松かえ

松平備後守六十賀使羽倉東之進為勸進

松齡久

やとからそ六十の後の末は尚まつの千年とともにへぬへし

保田大膳亮勸進

霞 置志字於頭

しつけしな波た、ぬ世の春見えて霞たなひく四方の海つら

北小路極蔭大江俊包七十賀俊民勸進

春松契千年

かそへ見む春をかさねて幾人も色そふ松の千世の行末

藤野井但馬成光勸進

藤花年久

名にしおふもりのしるし【の】(に) 咲藤の花や幾世の春かけてみん

稽古会

早苗多

けふも又植残してや数／＼のさなへつかねて帰る乙女子

暮春 当座

今しはし雲も霞もとちはて、春の別れの道へたてなん

萩 同

吹そよく音にしられて秋風のまつそ身にしむ庭の萩はら

霧 同

出る日の高根はそれと顯はれてまた霧ふかき遠の山本

稽古会 并当座一首

納涼

山ふかくわけ入陰の涼しさは夏もよそなる谷の下みち

野夏草

すみれつみ馴こし道もまとふまてしけりあひたる野への夏くさ

同会 并当座二首

水辺納涼

陰ふかき山の下水せき入てむすふもあかぬ袖の涼しさ

名所鶴

和哥の浦や松の千年の陰しめて浪もしつかにあそふ友鶴

寒蘆

浦風に堪すしほれて霜ふかき入江のあしは見るも寒けし

炭竈

長閑なる色とはなしにすみかまの煙にかすむ峯の松原

同会 二首并当座二首

朝萩

今朝は尚花も一きは色そひて枝おもけなる露の秋はき

久恋

いつまてとあふせはなみの思ひ川うき身の上に月日流れて

山松

吹たえし程もしられてあらし山雲もしつけき峯の松原

忍恋

わりなしなしのふとすれと涙川袖のしからみせきあへすして

同稽古会 当座二首

庭虫

置露もこゑも寒けし鳴虫のうき秋かこつ庭の浅茅生

羈旅

たひ衣かたしきわひぬ草枕幾夜かさぬる野へのかりねに

月前草

照まさる月の光りにまはき原花の錦も夜としもなく

冷泉三位為村卿初度会

松添栄色

言の葉の栄る世々の色そへてみとりそ深き庭の松か枝

稲荷中社神主秦親冬宿禰七十賀親教勸進

寄杉祝

年たかく猶もさかゆけいなり山幾世をすきのふりしためしに

寛保三年

二月一日冷泉家会始

迎春祝言

敷嶋や道ある御世の光りより猶も長閑にむかふ初春

冷泉家住吉社法楽

紅葉浅

住吉や只一人のもみちはも松の木の間にふかき色なる

大乳人七十賀武田主殿助源晴方勸進

松退年友

松になる、人のよはひは尽せしなともに千年の春をふるとも

於北小路藤亭稽古会 并当座二首

鵜川

山ふかき陰やたのみて大ぬ川月の夜ころもう舩さすらん

郭公何方

鳴て行空はいつくとしら雲のたかねをこえし山ほとときす

寄木恋

かならずと契り置とも軒端なるまつにしるしのない身をそ思ふ

青蓮院官坊官経厚法印二百回忌追善鳥居小路法印勸進

夏懷旧

めぐりこしけふや昔のかけならんむかふ卯月の空におもへは

入江修理権大夫藤原則信朝臣、今年八月八日十七廻なるを

そのころわたくしならぬ事ありて、後四月八日に靈祭とり

行はれければ、その日の饗にあつまりて

廻りこん昔の秋の面かけを後のう月の空にしのひぬ

五月八日松室近江秦救重七廻忌追孝十首組題之内依重周勸

進詠二首

溪五月雨

雲うつむ谷の戸ほそのあけくれに水音たかき五月雨の比

夏草

此ころはかよふ野原もしけりあひて跡さへ見えぬ露の夏草

冷泉家玉津寫杜法樂

早苗

おくれしと神のみやつこゆふかけてみとしろ小田にさなへをそと

於北小路極蔭亭稽古会

五月五日

きのふよりふけるさつきのあやめ草あれし軒端もけふそかくる、

五月雨晴

限りあれば雲間も見えて五月雨のはれし夕日のかけぞ涼しき

蛭似玉

難波かた入江の浪のしら玉か見るめ涼しくほたる飛かけ

東家故中神主秦親榮宿禰、今年五月十三日五十回にめぐり

給へは、その孫親定宿禰御靈祭とり行はれければ、よみて

送り侍る

ほと、きすいなりの山のすきかてにしのふむかしをけふやかたらん

けふは尚むかしの人をしのへとて香に匂ふらん軒の立花  
末遠く猶こそとはめ百年の半ふりこしけふのむかしを

赤塚土左守春原正逸朝臣八句賀

おほよそ人の上にはひをふる事こそ得かたきものはない  
れ、又子たるものゝ、ほとにしたかひよろこふへきはおやの  
いきのを長きほと悦こはしき事はなし、爰に春原正福ぬし  
の父正逸朝臣はもちし人の世にまれなる事にいひ侍る七  
十のよはひもたやすくへ給ひて、ことし八十かへりの春を  
も過來して、此たひ五月上つころよき日をえらひてもゝた  
らぬ八十賀して尚年のをなかく八百万代もくりかへさんと  
なん、冷泉家に和歌の題をこはれければ対鶴争齡といふ題  
を作りて給はりけるよし、先の年やつかれかおやの七十を  
賀し侍らんと唐哥にまれやまと哥にまれ、たときいやしき  
をわかつたすその名聞しれる人ゝの言の葉をもとめかきあ  
つめ侍りし時、正逸朝臣はすてに七十の春秋をこともなく  
(前字)  
もなく過來し給ふはめてたきためし、かつは千年をもとも  
に契れなんとことふきて唐哥をこひ侍りしかは、露浅から  
ぬ一首を作り出て恵み給ひぬ、此たひ賀し給ふよし、幸に  
彼志にむくひまほしけれと本より唐哥の道はわきまへ侍ら

されは、つたなきをとかへり見すやまと哥一首つゝりて只  
ことふきをのへ侍る

はたのちかもり

けふよりそ猶も八十の末遠く幾千世契れ宿の友鶴

七十賀松室大隅秦重殖勸進

寄鶴祝

此宿のあるしをとと幾千年松にきなるゝ鶴の毛衣

稽古会 当座二首

窓前竹

すなほなるすかたを友と明暮にむかふもあかぬ窓の呉竹

逢不逢恋

何ゆへにうとくなりけん新枕ひとよのみとは契り置しを

霧隔船

見すもあかすみもせぬほとに霧こめて行ゑやいつこ宇治のかは  
ふね

同 当座一首

雨後草花

一通りすき行雨や染つらん露に色そふ花の萩原

夕鷹狩

夕月夜をふさの鈴も音さえてとかへる鷹のかけの寒けさ

同 当座一首

名所月

浦風に雲霧はれて明石かたなかめはてなき沖の月かけ

羈中懷都

草枕都の秋をおもふそよかた敷袖につきをやとして

同

山路玩菊

尋見るかひも社あれあさからぬ山路の菊の花の色かは

非藏人にて仕ふまつりける時

八月十五夜月

あふかはや霧も及はぬ雲の上に今宵名高き月の光りを

寛保三年八月廿九日冷泉古大納言為久卿三回忌右兵衛督為

村卿出題

寄露懷旧

三とせへし跡したふ身は露としもおもひけぬへきけふの夕暮

柿本社法楽冷泉家勸進

山家夢

山深くのかれ住身の枕にもうき世にかよふ夢はへたてす

稽古会当座

行路紅葉

道の辺やあかぬ心の色そへて手折ゆく手の木々の紅葉は

同 探題当座一首

羈中友

旅ころもともに都を立出てかたらひきつる中そしたしき

黒

世をいかに逃れし人の色ならん哀そ深き墨染の袖

同 探題当座一首

寄時雨恋

村しくれふりみふらすみ定めなき人の心をうき雲の空

駅路雪

ふりしきる雪の夕のやとりをや馬屋つたひにいそく旅人

稽古会満

年内梅

後れしと先咲ぬらし年の内に春も立枝の梅の初はな

惜歳暮

かはらしな高き賤しきなそへなく暮行年を惜む心は

同四年

正月廿八日玉津鳥社法楽冷泉家勸進

初鶯

鶯もおのか初音を神垣に花のしらゆふかけて鳴らし

冷泉家会始

霞添春光

此ころは春の光りも尚そひて長閑にかすむ四方の山端

於北小路極藤亭会 探題当座一首

柳靡風

咲出ん花にはよきよ青柳のなひくにあかぬ庭の春風

残春少

ことしけき身には尚こそ惜まるれ幾日もあらぬ春の名残を

同稽古会

桃花曝錦

唐錦夕日のかけも打はへて色に色そふも、のくれなる

やよひのついたち春原の成光はたの親みち等御いとま給は

りて伊勢大神宮と春日社にまうてける時よみて送り侍る哥

二首

みそきして向ふ心や五十鈴河さそ浅からず神はうくらん

春日山神の恵みの広前にさかく御世を尚祈るらん

二月廿五日北野聖廟法樂藤野井但馬勸進三首

松鶯

万代の春や契りて神垣のまつに來なる、鶯のこゑ

鷹狩

かりくらし今一よりと分るの、名残ぞ深き鳥の落草

旧恋

ふり残る枕の上にしたへともいまはその世を夢にさへ見す

延享元年五月  
住吉社法樂冷泉家勸進

夕立早過

淡路嶋はとなく晴て墨江の浦に涼しき夕立の空

延享元年五月廿二日被奉官幣於稻荷社之時奉神納歌三首并序

掛まくもかしこき此稻荷山にまします三柱のおほむ神は、

和銅四年二月壬午日此山の三峯にいつきまつられ給ひて世

を守り給ふ、そのうつくしみは神風の伊勢の内外のおほん

神とも、空にみつやまとの広瀬立田のおほん神とも、瑞籬

のへたてなき御うつくしみにして、国の内の青人草をめぐ

みたすけ給ふ事もひとしければ、おほやけわたくしとな

く、さす竹の大宮人をはしめあまさかるひな人にいたるま

で遠きも近きも此山にあゆみをはこひたうとみいやまいま

つる、けにそのむねそ侍りぬ、ましてそのかみの御世く御ゆきましませしためしもかすおほく、おほやけの月なみの祭りにもあつかり給ひ、年こひの御使立られしよそほひ、う月の祭りのいみしさなどはいまさらまねひ出つくすへくもあらずかし、すへて一とせの内にはかすく神わさあり、そのありさまは春の花のいろよりもうるはしく、秋の月の光りよりもきら／＼しくそ侍りぬ、しかありしに応仁の頃ひ海の浪もしつかならず山のあらしもおさまらずして本末うたふ榊葉のこゑも枯はて、あとかたもなくそなりにたり、されとおやのおやよりその跡をつきおこしてまさきのかつら長く伝はれとなん、子の子のすゑも尚青柳の糸たえずして今も尚年／＼月々の神わさおこたる事なく仕ふまつり侍りぬ、かゝるに今天下しろしめす御世のあまねき御うつくしみは山よりも高く、ひろき御めくみは海よりも深くおはしまして食国のうちゆたかにきはひ、家々とみさかえてさ、れ石の岩ほとなる悦ひのみそ聞え侍る、すへてもろ／＼の道をもすてさせ給はす、殊には神の道をあかめ給ひいやまひ給ふあまりにふりにし神わさをおこし古の事をおほしいてさせ給ひて、ことし延享元年五月廿二日をと

よとしのよき月のよき日と扱ひ定め給ひて上つ七社のおほ  
ん神たちにいやしろのうつ御幣を捧け持しめて奉り給  
ふ、此いなり山の御社には従四位上藤原冬輔朝臣を御使に  
立しめ給ひて、御礼代のみてくらさ、けまつり給ふ、此あ  
りさまを神ながら平けく安けく聞しめして悦ひ給はん神慮  
を押はかりまつり、又はやつかれ此御ときにあひてこの神  
わさにあつかり仕ふまつる心のよろこひ、かしこみなから  
押と、めかたくつたなき言の葉を三首つくりてかしこみか  
しこみも奉り侍る 下社禰宜秦親盛

宣命

神もさそうれしとけふのみことのり八百万代と聞しめすらん

大幣

稲荷山大みてくらをさ、けもて尚社いのれみつの神垣

官幣使

いなり山むかしの道に立かへる御代にあひあふけふの神かき

延享三年

二月朔日冷泉家会始

鶯千春友

此宿のたかきに移るうくひすのともなふ声も幾千世の春

同四年

二月一日冷泉家会始

春松久縁

若の浦や幾世みとりの色そへて春に榮えん松の言の葉

冷泉家住吉社法衆

忍涙恋

わりなくも色にや出ん涙川袖のしからみせきかへせとも

八月廿九日冷泉古大納言為久卿七回忌

為村卿出題

対月思昔

向ふ夜の空にそしたふ七めくりたりこし秋を月にかそへて

同五年

二月朔日冷泉家会始

春生人意中

世をいはふ詞の花の色にこそ人の心の春もしらるれ

稽古百首之内

十二首

余寒氷

打出し浪の花をも今朝はまた氷にかへす谷の春風

故郷春月

みよしのは春のふる里とは、やな花も匂へる月の夕に

花処々

春にそふ色香は尽し散は又咲るさかさる花も見ゆれは

瞿麦

置露の色もわかれて百草の中に涼しきなてし子の花

六月祓

たれもけふはらへ清めてくさくさの身の罪咎やみな月の空

松下躑躅

夕日かけ照そふ松の下つゝしあけもみとりも色そはへある

藤繞庵

紫のゆかりをとへは奥ふかく藤咲うつむ木々の下庵

岡郭公

さたかにも聞ぬ初音は岡の名のしのひくゝに鳴時鳥

関屋月

板ひさしもりこし月におもふそよふはの関屋の秋の昔を

寒草

見し秋の花かあらぬかしら菊の枝も葉末も霜の寒けさ

寄琴恋

聞てしも哀よふかき闇の内に身のうきことやしらへそふらん

窓燈

見るふみの光りをそへよ小夜ふかく猶もまなひの窓の燈

五月五日鷹司故内府公七回御忌牧大炊助義備勸進

遠郭公 頭置遠字

小倉山おほつかなしやほとゝきすしけき木陰の奥深き声

四月十三日稲荷社の神わざに預り仕まつりて

まつるてふいなりの山の葵草幾千世かけて尚も仕へん

稽古百首之内 三首

水郷鷺

しら浪のよるかによそに水無瀬川浅せにあさる鷺の一むら

懷旧

あふくそよ見る巻くゝに残し置そのかみの世の道のふること

初恋

まよふへき身の行末のいかならん思ひ立ぬる恋の山みち

藤野井石見実母一周忌勸進

夏懷旧

月も日もけふにめぐりて五月雨のふりし跡とふ袖やしほれん

三品宗永之隱室題 応求

静観亭

世はなれし宿なら【ねとも】（なくに）山よりは尚も静に住身をそおもふ

稽古百首之内 二首

野草秋近

夏の野の草の中にも萩か枝は先秋近き花に咲ぬる

江水鳥

夜を寒み同じ入江のをしかものこほりの床のうきねをそ鳴

七月二日東麻呂先生十三回忌

めくりこし秋をかさねてけふは尚ふりし跡とふ袖の露けさ

同為供進勸進題

対月思昔

向ふ夜の月にそしたふ十年あまり三とせふりこし秋の面影

寛延元年

八月十日前妻之母順正院一周忌追悼哥秋十首

秋雲

吹さそふ峯のあらしにめくり来て袖そしくる、秋のうき雲

秋霧

跡をとふ山分衣たちこめて袖そしほる、秋きりの空

秋岡

身にしてみて吹もさひしき此夕軒端の岡の松の秋風

秋野

深草や哀をそへて鶉なく秋も末野にむかし思へは

秋草

めくり来て跡とふ秋の草の原分行袖そ露にしほる、

秋木

露なから染し梢を折そへてたむくるけふの秋の言のは

秋鳥

さらてたに露けき秋の袖の上になみたをそへて来鳴雁かね

秋虫

哀とやなれたにも鳴鈴虫のふりこし去年の秋をむかへて

秋思

なへて世の秋のおもひにそへて尚ものそかなしきけふの夕暮

秋夢

さめてけふ尚こそしたへめくりこし秋のそのよの夢の面影

稽古百首之内

聞窓

はかなしや見もせぬ人の声をのみあやなくしたふ袖の涙は

寄山恋

年ふとも猶もかはらし山の名のときは色に契る言のは

寛延元年九月奉賀家父三位八句詠四季十二首

霞

稲荷やまこのめも春のしるしとてかすみ色そふ峯の杉村

若菜

野を広み八十の春の初わかなつむとも尽し千世はふるとも

花

かさゝても老やかくれん春ことに花の色香になれくし身は

郭公

ゆふかけてあかすとそ聞時鳥いなりのやまの杉間行こゑ

五月雨

五月雨のしはし晴間に澄月の光り待えし軒の玉水

納涼

松かねの岩井の水の底清みいく千世すめと結ふ涼しさ

秋野

秋ことに来つゝそめてん行末も遠里小野の花のもゝくさ

月

千々の秋つもらん老の後も猶あかすやめてん長月のかけ

紅葉

先そめし露のは山の紅葉はまた奥ふかき色そ見えける

千鳥

をのか音も千世をや契る浜千鳥はまの真砂のつきぬ例しに

氷

しら浪のよすかと見しもこほりけり流れ絶せぬ河の汀に

雪

陰高く降積りこし松かえのゆきや千年の姿なるらん

杖に言付侍る哥

呉竹の千世をかさねて切杖はつくとも尽し老の行末

上総国菊間八幡宮神官平治胤為五位之加級願上京之時贈哥

并詞

秦親盛ぬしは奴かれにうるはしき友垣になん侍ける、三十

年の昔此稲荷山に在し時、おなし学の窓の内にあけくれ心

おきてなくしたしみ侍りける、しか有て古郷に帰り、今は

た八月玉櫛笥二度京に登り木綿たすき思ひ懸すも逢見つる

と悦ひて日終尽ぬことの葉の序にぬし教ていふ、又更に別

るゝともいまし子孫正胤こしな是我子とはらからのことく

替らしとなくも、情ふかき言の葉を喜しみ庭の松に寄て老の

腰折哥つゝり侍る

治胤

年をふるときはの恵み此松の幾千世契れうみの子までも

返し

親盛

千世かけて子の子の末もかはらしな松をためしに契る言の葉

上総国菊間の里八幡宮の神官根本大炊頭平治胤ぬし五位の  
加級宣下ありて本国へ帰るよし聞えければよみておくり侍  
る

位山やすくこえ行ためしあれは尚ものほらん程をしそまつ

嶺南先生桂華詩箭といふ書を書ひてちかおみにつけておく  
り給はる、其詩の韵をふみて

又たくひ最中の秋の言の葉【の】(に) てりそふ月の光をそ看

重周父之一周忌勸進

垣根 權

朽残る去年のかきねにめぐりこし秋やかなしむ露の朝かは

十月十七日青蓮院宮坊官経乘法印二百回忌追善鳥居小路大

藏卿経雄勸進

冬懐旧

けふこそは猶もしのはめ神無月しくれの雨のふりし昔を

稽古百首之内

寢覺時雨

残る夜のねさめの床に音信て時雨をさそふ軒の松風

落葉

此まゝにはらはてそ見んいな山もみち散しく杉の下道

樵路霜

霜ふかき谷の細道わけ入てましはこる身の寒さをそ思ふ

寒草

色さむみ苞の菊【の】(は) 置霜に秋見し花のおもかはりして

柏霰

枯残るならのはかしは音たてゝ霰たはしるかせのはけしさ

冬月

身にそしむ庭の浅茅に置霜の色を重ねてさゆる月影

磯千鳥

塩の山月のさしての磯つたひ声もさやかに千鳥なくなる

谷雪

山人のとひこし道も跡たえて雪に淋しき谷の下庵

雪中鷹狩

ふるまゝにをふさの鈴の音さえて雪にとかへる真白ふの鷹

神楽

神垣やみやまのあられさゝの葉のこゑもさやかにうたふ宮つこ

炭竈煙

夕煙ゆきけの雲に立そひてなひくも寒き峯の炭かま

冬梅

降まかふ園ふの雪の花の色に咲おくれしと匂ふ梅か枝

歳欲暮

いつしかとことしもけふは呉竹のひとよに残る名残をそ思ふ

同二年

二月冷泉家会始

梅花久芳

幾日数雪の中より春かけていや咲匂ふ菊の梅か枝

二月三日、四歳なるむすめまかりける時荷田信名宿禰よ

り二首送りにて

よそにたに聞もかなしきみとり子の見るまに消し雪の哀を

はかなしとさこそなけかめ撫子の露よりもろく消し哀を

返し

親盛

おもひやれおひそふ春のみとり子のあからめさせるけふのなけ

さを

露よりもろきは春に生そふと見るめむなく消し撫子

菅原正代賦桃花曲請和歌応求詠二首

馥字

春幾世色をそへつ、三千年にふるてふ桃の花ぞ馥し

色字

夕附日薄きもこきも照そひて紅にほふも、のいろ色

鴨の光篤をはしめ友とせる人十たりはかりいひあはせて大

井川に逍遙し侍るとき松尾社にまうて、

いさともにまつや祈らんときはなる松尾山に君の千年を

月読社にまうて、

あふかはや松尾やまにかけ高く世を照します月よみの神

下向の程、松尾なる友重道重勝相連重篤大井河にあなひし

て網を引せて子あゆなとるを見つ、さけたうへければ、

けふの悦ひをのへまくよみ侍る

浅からず猶も杜くめ大井（大井）なみくならぬけふのなさけは

小雨ふり出ければ人く笠とれといひければ

ぬれてしもなにはまし村雨の春浅からぬ露の恵みに

しはし雨もはれさりければ御社の辺なる家に席をうつし

て、人くさけをくみてうたひあそひければ

おもふとち松尾山にゆふかけてうたふもあかぬ千世の言のは

とよみすて、菅原の正名いさなひて帰りぬ、久我里に兄親

安宿禰住侍りければまうてはへる時、鳥羽野を経てよみ侍る

百草の花もみとりも色はへてかすある野の春の長閑さ

寛延二年三月廿八日上野輪王寺宮上洛し給ふ時、人くひあはせて近江なる湖水のほとりにて迎春らんとまかりければ、しか谷といふ所を経て花山にいたりければつ、しの花多咲たりければ

なをさらにめてなんよりは岩つ、しいさ手折行花の山道

山科の里にいたり、しるへ求てしはし立やすらふ程にあるし出向てかたるを聞は、きのふ愛知川洪水にて旅人の渡りも打絶けるよし、しかあれは宮もと、まらせ給はんや、いふかし、けふかあらん、あすかあらんと侍はへるよいひければ

春霞おもひ立ぬるけふと杜まつもかひあれ山しの里

山科の里をはなれて南のかたを見やれば、かすめるあなた杜音羽の里なれと人のをしへければ

嵐ふく音羽の山は峯はれてふもとの里そ霞たなひく

走井のこなたにて藤の花咲りけるを人く哥よめといひければ

春ふかき松のみとりに紫の色をかさねてかゝる藤浪

走井にて立より、しはしやすらふ程にかきつはたの咲侍るを見てよみ侍る

紫の色をふかめてかきつはたえそせきあへぬ水の走井

相坂をこゆる時古哥をおもひ出てあふさかや梢の花を吹からに嵐そかすむ関の杉村とくちすさひつ、更によみ侍るあふさかや花の名残の色もなく嵐はかりそ峯にかすめる

大津にいたりければ宮はいよく今日なんこ、につかせ給ふよし、只今告来りけるとなん聞えければそれより打出の浜にいたりうみを見やりて

海は、や打出の浜に打見れはたゆたふ船のかすむ長閑さ

膳所にいたりて宮をまち奉る程によみ侍る

浪風も音打そへてあふみちや駆つたひの鈴もきこゆる

五月五日、平松三位時行卿、大原左馬頭重度朝臣、走馬見給はんとて此いなり山にまうて来り給へと、すてに走馬すみ侍りければ是より藤森にまうて、走馬見給ひてかへり給ふ程、やつかれかもとへ立より給はんよし聞えければ、必と契りて藤森の走馬をはりけん程、いまやあらんとまちすくす程、人して雨もや、はれぬ、すくに帰り給ふよし告給

ひてすくにかへり給ふを恨みて大原家までよみて送り侍る

親盛

五月雨のはれ行空をかこつかなぬれきぬきてや君はとほんと

稲荷山まつにはしるしなきものを君とはなんとなにおもひけん

藤森の走馬見んとて思ふ友とちともなひまかりけるに、稲

荷杜にて宿禰親盛のもとへ立よりけるにあるしもてなし

と、め侍りけるに雨ふり出ければ走馬もはや過なん、帰る

さに立よらましなといひて出ける、走馬はて、雨いたうふ

りぬれば帰りくる道遠し、又こそとはめと人していひやり

かへりければあるしいたう恨みて哥をなん読て送りける返

事にかくなん

重度

ましてしはし又そ友とちとふらはんた、五月雨の空にかきらし

くやしくそとはて過ぬる稲荷山まつは久しき心つくしを

嶺南先生作詩賀親臣之出身贈云

玉樹金茎鬱勃哉 紫垣盛夏冷涼催

知君不苦人間熱 冠帶全霑雨露來

和韵

幾しほもみとりの袖や色そへん人のめくみの露のふり来て

寛延二年八月四日輪王寺宮関東へかへり給ふ時、送り奉る

とて大坂にいたりて

すきうくも雲霧ふかく立こめてしはしと、めよあふ坂の関

九月十五日橘毘経賀猶父之七旬勸進

松経年

末遠く猶も栄えん此宿のあるしになる、千世の松かえ

六波羅なる樋口の翁の元へまうて、物語し侍りければ、こ

とし夏より秋かけて軒端の松に花の咲たるか、或人世にめ

つらしきものなれはとてその花のありさまを絵にうつしと

めたるよし見せける、誠に十かへりの花なるへしとおちを

ことふきてよみ侍る

咲やこの花をためしに老は尚ゆくすゑ契れ千世の松か枝

同三年

二月廿八日冷泉家会始

松添春色

此春は色そふかけもいや高く見えて栄る宿の松かえ

三月十四日賀家母之六十奉杖書付其杖歌

呉竹の杖にともれる千世の数猶とりそへよ老の行末

筑前国直方なる物部の老翁、今年正月の末におちの家にう  
からやからつとひても、たらぬ八十の賀してことふかれけ

るよし告來たる文の奥にみつからの哥なりと  
けふといへは八十の春にみつ塩の蘆辺の田鶴とともにあそ  
はん

とよめる、誠に仙人の鶴にのるてふふることのさまに覚え  
て尚幾千年もとしのをなかくくりかへし給へることふきて

ちかもり

此やとの八十の春の末遠くけふより【老の】（契る）千世の友  
鶴

寛延三年四月廿三日

さきのすめらみこと神さらせ給ふをかなしみ奉りて長哥一

首并短哥一首かしこみなから書付侍る

さためなき 世のことはりは さもあれと はこやの山の 君  
はいかて ときは松の とししく あからめさすか こと  
しとは 思ひもあへす 烏羽玉の やみのうつゝに ふしまろ  
ひ 夢に夢みし こゝちして せんすへしらす いはんすへ  
しらすかなしみ かすならぬ 身の言の葉に かけまくも か  
しこみなから 雲の上に こよひう月の ほとゝきす 哀をそ  
へて しのひ音の しのひくゝに 春秋の 花や紅葉の 折々  
に 御心そめし みゆきまで おもひ出れば さす竹の 太宮

人は はれやらぬ 心の雲の むらさめと ふるやなみたの  
ひまそなき 四方の国くしまくゝの 青人草の うへまで  
も さこそ袂は 露けかるらめ

反哥

村雨の露も涙にふりそひてしたふ袂はほすひまそなき

荷田信名宿禰のもとより神事のものゝ書付をあとらへこ  
しゝそのいやしろにみきを一瓶おくりけるその文の奥に哥  
一くさよみて

君かかくるなさけのいやに笹竹の露はかりなる心くみしれ

となんかき付ておくれるその返事に

幾千たひくむともつきしさゝのはの露浅からぬ君かなさけは

九月十三夜於目代家探題当座三首

閑見月

ちりの世をかこつ心も月影にはれてしつけき蓬生の宿

月前菰

秋の野は風にくまなく澄月の光りをちらす露の萩原

杜間月

所からはゝその杜の紅葉はに月のかつらも影そ照そふ

十月廿七日於当家稽古会兼題一首当座

夕時雨

夕附日おもひもあへす村雲にくもるともなき影ぞしくる、

山家冬朝

谷の戸の枯生の薄ほのみえてあくるも寒き霜の下庵

冬祝

いやつきに尚ふりつもれうつし植し松のみさはの千世の初雪

十一月於松本筑後守亭稽古会当座三首

野鷹狩

かり衣日もゆふかけてわくる野に心ひかる、鳥の落くさ

杜寒草

散つもる杜の木葉に下草の霜をへたてし色も寒けし

深夜雪

小夜ふかき枕にきけはしら雪のつもるもしるき竹の下折

古寺鐘

高野山峯のあらしのさそひきてふもとにひく入相の鐘

於小番所<sup>(番所)</sup>詰合之朋輩密々稽古当座得題三首

月前旅

草枕野辺のかりねの袖の上に置露ながら宿る月かけ

遠村雪

里遠み雪にわかれす埋れて煙のみ立けさの山本

寒夜埋火

ねやふかく霜や置らん埋火の光りもうすぐさえあかすよは

於祇川佐渡守亭稽古会 当座四首

年内早梅

雪もまたふるとしなから園の内に春まつ梅や先匂ふらん

屋上霰

小夜風を先さき立てまきの屋に霰ふりくる音ぞはけしき

河雪

それとしも色はわかれす鷺の立河すにつもる今朝のしら雪

松雪

音たてし嵐も今朝は埋れて雪にしつけき野の松かえ

於松本筑後守亭稽古会 并当座二首

社頭祝

くもりなき御世の光りにいなり山猶もてりそふみつのとし火

冬雲

吹さそふ松の嵐は音たえて雪けの雲そ峯に残れる

冬河

河岸にこほらぬ水や音たて、朝風さむくよするしら波

同四年

二月十五日於羽倉出羽守亭稽古会 当座二首

梅近聞鶯

松ならて軒端の梅の鶯も千年の春の初音をそ聞

初春氷

春風に氷もけさはとけそめて長閑によるす池のさゝ波

田上雁

夜をさむみ衣かりかね露霜の小田もる袖の哀をそとふ

於大西下総守亭稽古会 当座二首

江上春望

春は猶なかもありし住吉の波間にかすむ淡路嶋山

春鐘

あかすみる春の色香も暮ふかく名残をそふる入相のかね

春祝

あひにあひてあるしになるゝ松かえは幾千世春の色をそふらん

於松本和泉守亭会 但当座無之

池辺藤花

池水の汀の松に紫の色をふかめてかゝる藤波

三月冷泉中納言為村卿都鄙之門人為稽古出五首題凝風情可

有詠出之旨勸賜哥

花

めてあかてこゝに都の桜花よしや芳野の春はありとも

郭公

まつといふ程そ久しきほとゝきす只一こゑに明やすきよも

月

夜半の空行ゑもしらす詠めつゝ秋のこゝろそ月にうかるゝ

雪

大比叡や河原の遠にこの朝けむかふもあかぬ峯の初雪

述懷

さま／＼のみにひかるゝ我心ひとつをたにも学ひえすして

為村卿

ひとつたに学ひえかたき身としらはさのみあまたの道にひかるな

右宗匠家よりすゝめ給ひし五首の哥をよみてうかゝひ侍り

ければ御詠をそへ給ひしかは

親盛

色もなき言の葉なから春にあひてうるふ恵みの露をかけぬる

広橋大納言兼胤卿あつまよりかへり給ふいへつとゝて桜花

の絵と楓の紅葉の絵を恵み給はりけるときによみ侍る哥

うつし絵の色とり深き花もみち恵みの露をかけて杜見れ

於松本和泉守亭稽古会 当座二首

蛩過窓

音そよく竹の葉分の小夜風にはたる過行窓の涼しさ

瀬夏月

明やすき影をやとしてはや瀬川しはしはよとめ夏のよの月

於松本甲斐守亭稽古会 并当座一首

行路卯花

雪と見てわけ行袖もさむからすうの花咲る里の中道

待郭公

今宵社世にしのひ音も此宿のまつにかひあれ山ほとゝきす

於当家稽古会

雨中早苗 并当座一首

植わたす田のものさなへふる雨にうるふみとりの露も涼しき

松下納涼

松か枝のみとり涼しき木かくれはなつとしもなくかよふ夕風

於松本筑後守亭稽古会 当座一首

瞿麦帶露

撫子の花の色く色そへてうすくもこくも見ゆる朝露

落花

さそはても散てふ花よしさらは風の心にまかせてや見ん

樹陰納涼

稲荷やま涼しき木かけすきかてにしるもしらぬも立そ休ふ

或勸進

秋懷旧

したへとや残し置けん露しくれ更にふりぬる秋の言のは

思往事

程しなくおもふわかれをしたふ間に袖の涙も日数ふりぬる

於羽倉出羽守亭稽古会 当座二首

菊久盛

幾秋もさかり久しき色に香に山路の菊の種と杜しれ

雨中紅葉

露霜のそめし後さへ秋の雨に猶色そふる庭の紅葉は

山家暮秋

山ふかく霧立こめよ柴の戸のしはしとゝめん秋のわかれを

於祇川佐渡守亭稽古会

水初結

此朝け岩こす浪のしつけさは先河上や氷そめけむ

見恋

袖ぬらす身は海士人のたくひかも契りはなみの見るめはかりに

六十賀或勸進代親臣詠

椿葉久縁

末遠く馴見ん千世の山椿はかへぬ色を友と契りて

羽倉左中信満勸進

霞隔遠樹

春にそふみとりもそれと見えぬまで霞こめたる遠の松原

羔豆御牧

露なからみつのみまきのまこも草吹な乱しそ淀の河風

宝暦二年二月尾州東照権現社神官吉見左京大夫八十賀其子

大膳大夫幸混勸進依願飛鳥井大納言雅香卿出題代親臣詠

松樹契久

契りこし八十をためし幾千世も尚もなれ見ん宿の松かえ

宝暦二年

八月於大西下総守亭会 探題当座二首

八月十五夜月

名さへ世にみてる最中の秋月照そふかけは似ものそなき

月前旅

草枕かりねの野への露なから月をかたしく袖はうからす

月前祝

名にしおふ月や幾秋此宿にかはらぬ影を空にみすらん

九月十三日於当家会 探題当座二首

菊契多秋

契れ猶千年の秋をかさぬとも色香ふりせぬしら菊のはな

秋雨

更に猶かせの音さへ打しめり雨にさひしき秋の夕暮

秋祝

なへて世のとしある秋をいはふとて田面賑はふ民のこゑく

十月十九日於羽倉撰津守亭稽古会 当座二首

時雨告冬

暮ていにし秋の名残の雲路より冬をしれとや時雨ふりくる

初冬

ふゆきぬと音もさやかにさゝ竹の一夜にかはる窓の朝風

炭竈

大原や煙も更に立そひて猶そ賑はふさとのすみかま

稽古百首之内

雪似花

ふり積る雪の梢は咲花のおもかけなからさゆる朝風

忍恋

しのへた、涙は袖につゝ、むともあまるおもひや色に出らん

尋恋

問きてもかひ杜なれおくふかき人のこゝろは山路ならねと

十一月廿八日於松本筑後守亭稽古会 当座二首

依雪待人

跡つけてとひこん人に見せはやと猶もはらはぬ庭の白ゆき

山家水

濁なき人の心そ汲てしるこの山里の庭のいけみつ

名所松

言の葉の色をかさねて幾千年猶も栄えん和哥浦松

十二月於羽倉出羽守亭稽古会

竹不改色

此宿の竹の根さしの末遠く葉かへぬ色に千世を契らん

同三年

正月廿八日冷泉家会始

竹不改色

色かへぬかけにしられて呉竹の世に栄えそふ宿の言の葉

二月廿九日於当家会稽古始

春柳風静

くりかへし吹もしつけし青柳のいと長閑なる千世の春風

稽古百首之内

不逢恋

つれなしと恨もはてすしたふ身の心を人に知られぬそうき

待空恋

待夜半の偽り告る雁の音をいつきぬ／＼の空に聞まし

初春

長閑しなまつ吹かはるけふにあけて千里も同じ春の初風

連峯霞

立つゝかすみこめて大ひえや小ひえの峯も見えみ見えすみ

竹鶯

花ならて園ふの竹にうつり来てこゑも匂へる春の鶯

春雪

さえかへり残るか上にふりそふも積るとはなきはるの淡雪

行路梅

道の辺に行来の人の袖をさへ引とむるまで匂ふ梅か、

岸柳

行水もみとりをそへて河岸に春浅からぬ青柳の【糸】(かけ)

夕春雨

暮ふかく雲も霞も立こめて軒端さひしき春雨の空

曙花

露も尚ひかりをそへて山桜花よりしらむ春のあけほの

霞隔花

匂はすはそこもしらし山鳥の尾上の桜かすみへたて、

風前花

吹風はよきて吹なん桜花また散ぬへき色も見えねと

帰雁幽

をくるゝと見しも程なく行かたの霞にきゆる雁の一つら

同四年

二月朔日冷泉家会始

鶯入新年語

此宿の千年の春を鶯のもゝよろこひの初音にそしる

於竈家稽古会 当座二首

春月

かすめ尚さやけきよりも深き夜の月の哀は春に杜あれ

水辺款冬

結ふ手の袖さへ匂ふ山吹のはなの下ゆく春の河水

夜思花

夜の程に散もやせんと山桜こゝろにかゝる花のしら雲

江春曙

明石かた入江の小船ほのくとかすむ浪間に見えて明行

稽古百首之内

雲雀

若草の床しむる野の夕ひはりあかると見しもやかて落きて

里款冬

たかためにしのふの里の山吹はいはぬ色にや咲みたるらん

待郭公

幾夜かも待あかさはや時鳥なかつれなさに心くらへて

田家早苗

此里のかと田にむれて乙女子かさなへとりく声そ賑はふ

三月尽

けふのみと惜み社すれとしことに名残は同し春のわかれも

新樹露

薄くこく木々の若葉に置わけて露もみとりも色そ涼しき

猶そめむ秋はありとも夏木立露の若はの色そ涼しき

卯花

神まつるけふはさなからしろ妙の夕かけて咲杜のうの花

五月雨

日をふれはみかさや増る天の川雲の浪立五月雨の空

廬橘

しのへとてむかしの人の袖の香に花立花や咲匂ふらん

江蛭

置露の玉江のあしの葉かくれに蛭飛かふ影ぞ涼しき

於当家稽古会 当座二首

山家卯花

月をたによそにみ山の谷の戸も咲うの花のかけはさはらす

窓前栽竹

昔たか友と植てや今も尚明暮むかふ窓の呉竹

早苗

五月雨のはれ間に田子のおり立て取手涼しき露の若なへ

荒和祓

ゆふかけて風も涼しき河風に心のちりをはらへ清めん

稽古百首之内

夏月易明

槇戸にさし入と見し程もなく影ぞ明行夏の夜の月

夕立風

ときの間にふるも晴るも吹風の心にまかす夕立の雨

納涼

しはしとてやすらふ道の松かけは千世もへぬへくあかぬ涼しさ

池蓮

蓮葉のみとり涼しき池水に尚いひしらぬ花も咲そふ

河辺早秋

いつしかに先吹そめてよる波の汀す、しきあきの河風

七夕

あふかはややすの河原のやすらけく波た、ぬ世の星合の空

於目代家稽古会 当座二首

廬橘薫枕

見し夢のむかしにかよふしるへとや立花かほる夜半の手枕

鵜船廻寫

宵の間の月のほと、やう飼ふね先嶋陰をさしめくるらん

露暖梅開

春に今朝めくみ待えて咲花の匂ひこほる、露の梅かえ

寢覚規子

時鳥あかつきやみの一声はねさめの床にきゝそまとひぬ

於松本筑州亭稽古会

松風秋近

秋もやゝしのひくにかよふらん軒端涼しき松のゆふかせ

布引瀧

水上をふりさけ見れば天川雲井につく布引の瀧

稽古百首之内

庭萩

聞なれし松のひゝきも音そひて砌にさはくをきの上かせ

萩映水

錦をも洗ふと見えて行水にかけをうつせる岸の秋萩

湖上雁

さゝ浪やひらの根風さそひきて衣かりかね声の寒けさ

野外鹿

露はらふ峯の秋風吹落てすそ野の鹿の声も乱るゝ

朝霧

横雲の峯立こめて朝霧にあくるもおそき秋の山本

秋夕

徒にふりこし秋をおもふ身は猶も置そふ袖のゆふ露

駒迎

東より山路かさねて九重の朝にむかふ望月のこま

野分

露なからあかぬ千種の花も今朝うしや野分の風に乱るゝ

月照古橋

澄わたるむかしなからの橋柱名のみを秋の月に残して

深山月

秋ふかき霧も心もはるゝ夜はみ山しつかにむかふ月かけ

於松本筑州亭稽古会 探題当座三首

山田早苗

ぬれつゝもさなへ取らしけふ幾日賤は山田に雨を待えて

山家恋

世をうしと身を隠家のやま住も岩木にはあらぬ心とをしれ

旅宿恋

逢と見し草の枕の夢にしもわかれを告る鳥か音そうき

八月十五夜雨いたうふりければ

ふり出て影はれ間なき雨のよは月そ名のみの秋の中空

秋のこよひみちぬる影にふり出て月にわりなき雨雲のそら

於松本泉州亭稽古会

月前擣衣

くりかへし月見る程やとたえけん夜寒にいそく賤か礪も

遠樹煙

立つゝ家ぬもしるし山本のゆふけの煙ともになひきて

稽古百首之内

浜月

吹上のはまの秋風小夜ふけて中空高く澄る月かけ

渇月

はるかなる浪路もはれて明石かたなかめくまなき秋のよの月

擣衣

ねやの戸のひま吹入る小夜風にたくふ礪の音そ身にしむ

籬菊

幾秋も同じ色香に匂へ尚まかきしめゆふしら菊の花

杜紅葉

来てみれば木々のもみちの色も今尚おくふかきころもての□  
衣手ノ杜

於松本泉州亭稽古会四季鳥十二首探題当座

鵲 七月

昔より二星の中川にわたして絶ぬかさゝきの橋

浜辺寒蘆

浜ゆふの幾重か霜の置そてうら枯残るあしの葉もなし  
(マ)

寄衣恋

夢にたにあふよしもなき恋ころも身のうきことを思ひかへせと

稽古百首之内

瀧紅葉

紅葉はの木かけ落くる戸無瀬川瀧のしら糸色をうつして

暮秋

惜むそよもみちをかさし菊をつみあかぬ色香の秋のわかれを

逢恋

つらかりし人の心もいつしかにとけてあふ夜の中の下ひも

後朝恋

起出し朝の名残に道芝の露わけかへる袖そしほるゝ

稀恋

はかなしやおもひはてすもたまさかのなけの情を頼む心は

寄衣恋

夢にたにあふよしもなき恋衣身のうきことをおもひかへせと

恨絶恋

一こともさはことはりとおもひなはいかて絶なん□の恨□

寄衣恋

包むにもあまる涙の恋ころも袖はこそめの色と見るまで

寄野恋

ふみかよふしるへもとめて分入らんいく野の道はよし遠くとも

寄河恋

人しれすわたりそめてし思ひ川いかて我名の世になかれけん

寄木恋

かひまみにおもひそめたる錦木の千束つもりし人のつれなさ

寄草恋

昔誰まきそめけりな草の名のおもひの種は尚も尽せし

寄枕恋

わすれしな伏見の里の笹枕かりの一夜の夢の契りも

寄笛恋

我おもふ人は聞すや笛竹のうき音にたてゝこふる哀を

暁鶏

鳥も猶神代のまゝに天の戸のあくるを告る声そたへなる

山家嵐

はけしさに馴すは夢も結はしよ夜半の嵐のやまの下庵

同五年

正月五日三峯の神事にまうて仕ふ奉りて

いなり山引しめ縄をはる幾世かけて仕へんみつの神垣

二月一日冷泉家会始

逐年梅盛

千世の春ことはの花も咲そひて色香くはゝる庭の梅かえ

五十賀藤野井遠江成允勸進

松契千年

春ことに色そふ千世のかけしめて契り久しき【老】(まつ)の

行末

於祓川家稽古会

梅有佳色

咲やこの花に栄る色見えて盛久しき宿の梅かえ

稽古百首之内

寄浦恋

難波かたしらぬ見るめをうら浪のよるへ求てかるよしもかな

寺近聞鐘

深草や寺は葉山のこなたまて哀へたてぬ入相のかね

旅行

立かへりむかふもうしや旅ころも幾重わけこし峯の白雲

旅泊

浪まくら浦めつらしく住吉のうきねわする、夢の通路

述懐

たることのあかぬ心を思ふかな世々の恵みのあまる我身に

月前花

あかす見ん月のよこ路の花さかり色香をそへてかすむ光りを

雪似花

此朝け木々の梢は咲つゝ、く花と見るまで積るしら雪

祝言

あふけ尚此日本の外までもくらぬ世々の君の光りを

八月十五夜の月虫はみし侍りけれと宵のほとにしはし虫は

み終りてくまなくみちぬるかけに向ひてよみ侍る

雲ならてかくらふと見し影も今みちてさやけき望月の空

くまと見てむかふはしはし空はれて名におふ月の影そみちぬる

宝暦五年九月母まかりけるあした読侍る

さめてけさ尚社したへたらちねのおやのわかれそ夢のことなる

十一月十九日いとまをはり読侍る

藤ころもけふぬきかへし袖のみもしたふ涙の色はかはらし

妻木貞彦ぬしえらはれけるよし、拔櫛録といふ書一卷信郷

たつさへ来りていひ入ければ、くりかへし巻返しあまた、

ひ見侍りぬ、されとやつかれ本よりつたなく難波のよしあ

しをもわきまへ侍らされと、かのぬしの心さし山よりも高

くそのさま海よりも深くそなん覚え侍る、いはんやことの

心をもわきまへはへらん人はたれか是をめてさらましや、

こゝに信郷やまと哥を作りてむくひ侍らんよし聞えければ

やつかれも又たゝにもたさん事その心さしをしらざるに似

たれは、色なき言の葉ながら信郷の本までよみて送り侍ら

んとしかいふ

世人の心をみかく種ならん玉をつらねしまきの教は

(以上、第一冊・以下、第二冊)

宝暦六年

正月冷泉家会始

子日催興

諸人のけふ此宿に引つれて祝ふ初子の松は幾千世

社頭の花を見て

たれもみな心をそめてみつかきやいなりの山の花のしらゆふ

今稻荷のおほん神まします御社の辺を昔藤尾山と申侍るよ

し伝へければ、藤の花を見て

咲や此色をゆかりにしたふそよ藤尾山の花のむかしを

四月廿三日

桜町天皇御七回到泉涌寺の御陵を遙に拝まりてかしこみ

くも

七めぐりふりこし御世のおもかけを卯月の空に尚しのふかな

六月三十日に大西下総守はたの親みちの宿禰の伝を畧書し  
るして親業にあたふるその奥に書付侍る

なか父の世のふることをしたへとてそめし涙の水茎の跡

岡嶋信夫、物学はんと久しく東にまかり侍りて、此ころ京  
にまうのほりけるよし、このいなり山にまうてきて夕つか

た又京のやとりに帰りなんといひければ

旅ころも日もゆふされはいなり山すきうしといひてやとりとら  
なん

同七年

正月廿八日冷泉家会始

梅香移柳

枝かはす花の朝露ぬきとめてやなきの糸も匂ふ梅か香

二月、久我へまうする時大井河の流の末なりければいかた  
の下るを見てよみ侍る

いかたしよこかてやすらへ言とはん嵐の山の花やいかなる

久我よりかへるさ鳥羽の木陰にて休らひ侍りければ、夕か  
らす村かり行にいさなはれて

夕鳥とは山かけに休らへはいさはくとさそひてそなく

或人贈山藍其詩云恵日山中生異艸青々其葉染朝衣為君採取

幽溪裏此物從來相識稀

右答書之端に和韵

浅からぬ人のこゝろを山藍の色にや見まし小忌の衣に

谷ふかくこゝろをそめてとりえずは誰山あるとしるものそ稀

六月廿七日家父正三位七回供進之歌八首

頭置伊也太加乃美多磨八字

いや高く猶こそあふけいなり山世々にこえ行あとをしたひて

八十あまり老のみかけの夏衣しのへはぬるゝ夕たちの雨

たえすたる道のためとやかきあつめ残す恵みの露のふる□

かそへつゝしたふその世もめぐり来てことしも半みなつきの空

残し置庭の草木も露けしなあひにあひたるその世ふりきて

見せはやと春秋ことにしたふかなむかしかはらぬ花の色香を

たくひなくしたふ□<sup>(露カ)</sup>の露なから言の葉草を手向にそする

ます鏡見えよほとなくうつり来て空きそらにむかふ面影

七月七日於簾家当座

星河秋久

秋幾世ほしのいもせの中を行なけれ絶せぬ天の安川

八月廿九日冷泉古大納言為久卿十七回追慕為村卿勸進

月前感恩

さらてたにその世わすれぬ面影をこよひの月【の】（に）尚も  
しのはん

九月十三夜月

等閑にたれかあふかんとよあまり見よと照そふ長月のかけ

くもらしなあかぬ心に猶を見るよを長月の秋のこよひは

九月廿七日家母三回追慕秋十首

秋雲

長月やしたふその世の面影をたちなへたてそうき雲の空

秋霧

此朝け身をしる秋の霧こめて袖打しほれ物そかなしき

秋岡

小男鹿の妻こふ秋のめくり来てわれもしのひの岡になくも

秋野

たらちねのなき跡したふ秋の野の草分衣つゆにしほれぬ

秋草

くらふれは秋の草葉の露はなにけふの夕のそでの涙に

秋木

したふその昔の秋の色ならん猶そめつくせ木々の紅葉は

秋鳥

三年ふる秋の哀をそへて鳴軒の小鳥のこゑそさひしき

秋虫

暮てゆく秋もほとなき名残にや哀夜ふかく鳴むしの声

秋思

身をしほるけふの夕へはなへて世の秋のおもひの袖の露かは

秋夢

めくりこし三年を夢とおもひねに見しよはかなき秋の面かけ

荷田信郷見菊花賦詩二首贈

其答歌二首

人しれす咲る笹の菊花君すさめすはいたくわふらん

菊はけふ君かとひこし言の葉の露の恵みに色そゝひぬる

謝大西松本二君懇情

今日入芝蘭室来二君風操玉山堆 香茶美酒慙慙切 一夜笑談絶俗埃

謝大西君隱居而对菊飲

隱居無事尋榮忘 籬菊花開德更香 却不問王弘載酒 十千化蝶自充囊

松尾雅士来会后又賦唐詩一章見寄次韻以謝

松一瓢橋(橋カ)  
秦為以拌

忽喜故人驢士来 会君芳句百千堆 清談又有適心裏 忘却今宵世事埃

松尾筑州の本よりから哥二首送り給ふ、誠にねもころなる

心さした、にもたしかたく、つたなき哥を作りて玉韻をけ  
かして和侍る 是たのちかもり

君ならて哀夜ふかく露霜のふりぬる身をは誰かとひ来ん

うつろはて猶こそ残れ菊の花とひこし人のそへし色香は

十月十一日祓川家【の】(之) 始祖秦親賢今歲当百回曾孫

直親宿祢集親属奉靈祭予作十首歌奉供進之 秦親盛

時雨

神無月くもりみ晴み幾めぐりしくれふりこし百年の空

落葉

むかしこふる袖の涙のふりそひて庭の落葉を更に露けし

寒松

植置しその世しのへは陰さむみ幾年ふりし霜の松かえ

冬月

さむけしな庭の真砂の霜の上にかけもこほれる冬のよの月

千鳥

此川のむかししのふや友千鳥たえぬなかれをなれもとひ来て

曉雲

ふりし世をこ【ほ】(ふ)る寢覺の袖さむみ雪けの雲の空に向

ひて

夜雨

したふそよ音すさまし【き】(く)ふる雨に見はてぬ夜半の夢

の昔を

窓竹

此宿にたれもその世をしのへとて移し植けん窓の呉竹

述懷

うけひかん一くさもかな色もなきけふの手向のやまと言の葉

懷旧

見るまゝに猶こそしのへ此家の遠つみおやの祝ふ言のは

入道松室見山之室七十賀秦善長勸進

寄鶴祝

千世よはふ声に社しれ七十の行末遠き老の友つる

同九年

元曉口号

あくる夜のほとも知れて長閑さは鳥の八声も更に春なる

正月五日三峯にまうて、

稲荷やま春のはしめのみしめなは万代かけていはふ神垣

冷泉家稽古始出題

松樹遇春

千々の春榮の色やあふき見ん宿に木高き松の言の葉

東福寺龍眠庵采賦詩

不下下翫翫「鶯花」遊中世間上 幽齊昼靜シテ 対「青山」

塵談況復多玄理 鐘報「黄昏」未擬還

右訪竹林亭賦呈

維嶽草

作和歌答之

言の葉の恵みをそへて花鳥の色音もけふはわきて長閑けし

杜辺の桜花さかりなりとて、人々席を設て花見し侍る時に

稲荷山杉の木かけに咲花のしらゆふかけて猶も杜みめ

神かきの光りをそへて夕ぐれの花の木かけも更にさやけし

同十年

正月五日三峯にまうて、御影の御前にぬかつきて

いなり山昔の春の立かへり猶もさかゆけみつの神垣

田中社にまうて、

あら玉のとしもゆたかに御世やすく守れ田中の神のまに／＼

同十二日奉射の神事に弓場代にてよみ侍る

梓弓いての神つ子引つれて宮居賑はふ千世の初春

同廿八日冷泉家稽古始出題

春風先発苑中梅

此宿に千世の春風吹そめてそのふにつきぬ梅か香そする

松本甲斐守の本へ桜の花見とてとし／＼招かれければ

ちかもり

此やとの松になれきて春ことに花もときはの色と杜みれ

答

ためのり

春ことに見る一本の花なれとけふは一入君に色そふ

四月八日孫菅満於吉見家誕生始祝□当家歌

みとり子の名におふ菅の長き根に引れて我もおひさきや見ん

賀親安卿之七十

稲荷山願もみつの神垣に猶さかゆかん老のゆくすゑ

伏見にまかりければ、飯田の何かしかもとへ立よりける折

ふし、花火といふものを立侍る由、船をもふけて宇治川の

なかれをさかのほる程にふねの中へ月おもしろくさし入け

れは

呉竹のふしみの里の月かけに船さしむかふ袖の涼しさ

六月十九日隠士下村菊軒十七回到松本甲州の本へよみてお  
くり侍る、詞書畧す

したふ間にその世ふり来て十年あまり七とせめくるみな月の空  
見るたひに袖をそぬらすなき人のわすれかたみの水くきの跡

六月廿五日当家祖母三十三回靈祭奉捧哥二首畧詞書

六月の空にそしたふ三十あまり三とせふりこし老のおもかけ  
露深く心にかけし此家のうるふ恵みや世々にあふかん

七月二日東麻呂先生二十五回靈祭供進之歌三十一首其頭置  
先生所詠初秋歌文字并以寄露懷旧題為勸進

薄暮霞

昏る日の空にしたへは夕霞立もむかしのはるのおもかけ

聞鶯

更に今ふりこし春をしたひ来てなれも鳴らし鶯のこゑ

春月幽

物そうき身をしるかけかおほろけにむかへはかすむ春夜の月

見花

来て見つ、猶したふかな色も香も昔かはらぬ花の梢を

落花

もろく散花にその世のことはりをおもひそゝふるはるの木の本

款冬

けふこゝに昔の春の跡とへは只ふり残る露の山ふき

暮春

さらてたに昔をこふる身はわきて暮ゆくはるの哀そひぬる

首夏

世に花をしたふ涙か夏木たち今朝は青葉の陰も露けし

遠郭公

林頭の梢はるかにほとゝきすたか昔をやしのひ音になく

夏月涼

いにしへをひとへにしたふ夏衣涼しく向ふ月のゆふへも

瞿麦

老翁のけふの手向に折はへて袖もしほるゝ露の撫子

夜螢

はかなくそ月になる夜は草の原もゆる螢のかけも消行

萩風

かけしたふその文月のめくり来て萩吹風の音も身にしむ

袖上露

払へとも跡とふ袖は深草のは山の秋の露にしほるゝ

秋夕

類属のたむくるけふの言の葉の露そ置そふ秋の夕昏

閑見月

やとれ尚昔しのふの草の露おきゐて独むかふ月かけ

残月

年へても忘れぬ秋のおもかけは月にそ残る在明の空

紅葉

思ひ出て跡とふ庭の紅葉は、昔をこふる色と杜見れ

秋時雨

もろともにその世の秋をしたふ身も哀ふり来て袖そ時雨る、

寒草

ひとつ色に千種もけさは枯はて、霜のみ置る野への寒けさ

池水

庭までもとちはてぬとや水鳥の池の氷に侘つ、そなく

雪中友

めぐりきてふりし跡とふ我友はゆきにも絶ぬ道をしるへよ

炭竈煙

しのふ身の思ひもそふや炭かまの煙絶せぬ哀むかしを

歳暮

物かはりかへりこぬ世の名残まで暮行としに思ひそへぬる

嶺雲

明かたの【空】（峯）に別れし横雲の消て跡なきその世をそおもふ

深夜雨

聞そうき窓打雨に昔をも見はてぬ夢の床のねざめを

晚鐘

残身に聞しのへとや夕なく哀つきせぬ入相のかね

庭前松

花もあれと先此庭にふり残る松を手向のけふの言の葉

古寺

常ならぬおもひに世をもすて人の住やいかなる山の古寺

述懷

慕ふその月日もけふにめぐり来て手向色なきけふの言のは

懷旧

ほしあへぬ袖は朽なんはたとせにいつとせそへてしたふなみたを

以上三十一首

寄露懷旧 勸進之題

露けしなはたとせあまりいつしかにふりこし秋の跡をとふ身は

於松本筑後守亭会哥二首并当座一首

山家秋夕

物おもふ夕の空は山里も哀うき世の秋ならぬかは

八月十五夜

影はれて秋の半のとよあまりいつよりもけに月そ<sup>てか</sup>りそふ

都月

秋のこよひいつくはあれと先向ふ月の都の名にしおふかけ

八月十五夜雨いたうふりければ

晴やらぬあま夜は月の高き名もむなしき空と詠めわひぬる

右の哥冷泉為村卿なんし給ひて哥人の心は

晴やらぬ雨夜も月の高き名はかくれぬ空と誰も詠めん

ケ様によむかよろしく候

不知夜月

雲はる、稲荷の山のほのくと見えていさよふ峯の月影

立待月

此ゆふへ立やすらひて月まつをしらてとかむる人はあらしな

於羽倉出羽守亭会兼題二首当座三首

聞鹿

いつこにか妻はへたて、山鳥の尾上にこふるさをしかの声

籬菊

をの、えの朽しためしに咲菊の花の籬は山路とやみん

月前虫

鳴むしも今宵の月にうかれてやよはるともなき声のさやけさ

田家月

山田もるしつてもこよひは草の戸のさすかに月の哀とやみん

九月十三夜

日本の光りは今宵くもりなきよを長月の空にあふかん

秋つすの秋の光りと玉くしけふた、ひ月の名にしおふ影

羽倉越中荷田信里勸進

逐日懷旧

見し秋は日かすふりても言の葉の露のめくみの跡したふらん

稽古会二首并当座二首

落葉浮水

花ならはあはとや見まし水の上に色を残してうかふ紅葉は

蘆間鶴

浦遠みそれかあらぬかしら浪の蘆辺によるは鶴の一むれ

時雨

ときの間に峯の夕はかけ晴て山本遠く雲そしはる、

海路

行ゆくも船路にこふるふる里の空はひとつの波の海原

稽古会兼題二首并当座

浦千鳥

声さえて浪もあかしの浦つたひ月を友とや千鳥鳴らん

名所松

志賀浦やひらの根風ふき立て松のみとりをあらふさ、波

神楽

岩戸出し神代をためし明る夜の星となふる声そたへなる

十二月予依関東下向饒別会二首

山雪

大ひえやむかふ高ねのしろ妙はいまゆきて見んふしの面影

惜歳暮

と、まらぬ年の名残の跡とめて我もこえ行相坂の関

十二月十五日関東下向道中記哥五十一首

今年秋ふみ月二日をよき月のよき日とえらひ定めさせ給ひて將軍宣下あり、かゝる御悦ひは此稲荷の山のおほん社よりもつかふまつり侍りぬ、やつかれ御いはひに神主に補られ侍るとてつかさく此いやしろに仕ふまつるへしと聞えければ東にまうつるを人く馬のはなむけしてわかれを惜みければよみ侍る

としを送り春をむかへて東路の霞と、もに立かへりなん

旅立し侍る日吾おほん神のうつの御前にまうて侍りて

ぬさ取ていはふ旅路をまさきくそ神のまにくまらせた

まへ

十五日御殿預荷田信郷も神田の御しるしのふみの改めに預仕ふまつりぬ、ともにいなり山を立出ければ人く鳥居の迎まで送り侍るもあり、また相坂の関こえ行を見送り侍るもあり、やつかれも旅の哀をそへていと心ほそく侍りぬ

いなり山ほとなく暮るとしの内にまつわかれ行杉の下みち

あふ坂をこえ行時に

時をえて此よろこひにあふ坂の関路は駒もいさみてそゆく

打出の浜にいたれはやくめなれたりける、山もうみも見えず

雲霧たちこめたり

さ、浪や打出の浜に打むかふ山もわかれぬ雲の海つら

勢多の橋わたる

冬の日のあしとくいそく旅人もわたるはてなきせたの長橋草津につき侍れはやくれちかしてやとりをもとめ侍りぬ、この駅のまへに野路のしの原といふ所を過こし、時に哥よめと人のいひければ

浦つたひわけ行袖も風さえてあられたはしる野路のしの原  
十六日あけほのに草津のやとりを出て草津川の堤を行ほとに三  
上山の雲のた、すまひおもしろし

あふみちを朝たちくれは三上山今そわかる、峯の横雲

梅木といふ里にてくすしうれる家の辺にこしかきすゑたり

冬なから先咲いて、とはてしも里の名しるき梅の木のか村  
六地藏といふを過ゆけは三上山まかく見ゆ、横田川といふ  
川の橋をわたるほと、されて

水上もすゑもはるかにすくなるをよこた川とは誰名付けん  
水口の馬屋のこなたに松尾邑といふ里あり、この里の右のかた  
なる山にとしふりたる松一本あり、此木の本にます社を里の人  
正一位谷大明神と申す、としことに四月上旬の酉の日に御祭つか  
ふまつるとそいふ、おもふに松尾櫨谷にまします太神をいはひ  
まつりけるならん

いつの世にいはひまつりて幾千年ふりにけらしも松尾の神  
けふはつち山の駅にやとりぬ

十七日あかつきかたおき出て見れば雪ふり積りてほとへぬ旅な  
からけさは哀に心ほそくて

かり枕うすき袂にいまよりは雪をかさねんことそ侘しき

いく野といふ里をへて田邑川にいたる、左の方なる森を田邑の  
社と申す、雪のふり積りたるを見て

神のます田村の森のしるしにはこすゑ残らすゆふかけてけり

山中邑といふ里わたりの坂路雪いたくふりし

朝またき雪ふみわけし跡もなくつもるも深き山中のか村

伊勢やあふみの堺のほと七まかりとて坂道八町はかりあり、峠  
にこしかきすゑてやすらへはしき浪よするいせの海丑寅のかた  
に見ゆ、鈴鹿山をこゆる程雪いたくふり出て坂路はなめらかに  
こほりて岩根をつたふあやうさはなにのこゝろもなし、されと  
齋宮の女御の世にふれはまたもこえけりとよませ給ふをはふと  
おもひいつ

かくしつ、猶も世にふるものならはす、かの山は又もこえ  
なん

坂の下の馬屋をすくれはや、雪もやみぬ、新茶屋とて家居あり、  
茶をにてあきなふ、左の方なる山を所のやつこらは狩野の筆捨  
山といふ、誠に木立岩などのあやしくたちたるさま言の葉にも  
えこそ、関の駅にいたればすめおほむ神の宮にまうする道とて  
鳥居あり、左右におほきなる燈籠を立たり、信郷もおなくお  
りゐてはるかに拌み奉りて

あふくにはいよく、高き神ち山うなねをつきて過るはかりそ  
石薬といふ駅にいたりてやとる

十八日夜をこめてたちいつ、大なる川有をとへはうつれ川とい  
ふ、橋をわたるほと千鳥のなくこゑを聞て

なつされは夜川たちなんうつれ川かは風寒み千鳥鳴なり

四日市てふところより桑名の駅にいたる、みちのほと七つやみ  
つやなといふ所をへて行はまた大なる河あり、朝氣川といふ

冬の夜のあくる朝けの河風にこほらてよする波の寒けさ

午刻はかり桑名の駅にいたりてひるのものくひてしはしやすら  
ふ、海路をゆかて佐屋廻りとて川船にのりて行に風はけしく立  
て浪あらくさかのほる舟なれば風そむけてすゝめかたしとて舟  
をとゝめてしはしいかふ、やゝをさまりぬれはかことも船をや  
る、夕つかた西保村といふ所につきぬ、酉刻はかり佐屋の馬や  
にやとり求む

十九日そこをいて、神守の駅をすきて万場川<sup>マシハ</sup>にいたりて渡船に  
のりて岩塚といふところにつきそれより宮の駅にいたりぬ、熱  
田社にまうつ、宮の駅にてひるのものたふへたり、さんた橋井  
戸田川なといふ所を過て笠寺にいたる、こしの内より見やりて  
行、鳴海にいたる、こゝに松風の里といふ名所ありといふ、折

ふし田鶴の鳴声を聞侍りて

鳴海かた塩みちぬらしあしたつの声吹きそふ松風の里

こしの内にてくちすきみ侍れはこしのもの心ありけに此ところ  
によひつきの浜とて名所侍りぬ、哥人はたつね侍るそと聞えけ  
れは

なるみかたなれも友をやよひつきのうら浜つたひ千鳥なく  
なる

あふき川といふ川の橋をわたりければこしかさすゑて休らふ、  
信郷のもとより鳴海の哥よみ侍るやとこひければ

ほともなく暮行としの浦かせに老となる身の浪そかけそふ

地鯉鮒といふ駅にやとりぬ

廿日寅刻はかり立て牛田邑といふ里の左の□<sup>(カ)</sup>た十町はかり南へ  
ゆけはむかしの八橋いまは田沼はかりにて里の人その跡なるよ  
しつたふといふ過行は矢矯の里あり、昔日本武尊夷をたひらけ  
給ふ時この里にて箭を作らせ給ふより矢はきの里と名付たると  
聞えて

やまとたけ御子のみことのおはしけんやはきてふ名を聞も  
たふとし

岡崎の馬やをへ藤川にいたりてひるのやすらひせり宝蔵寺邑と

いふ里に宝蔵寺といふ寺あり、信郷此寺の僧をしれるとて立よりぬ、吾もこしかきすゑさせてその辺なる山く々と見る中に山のた、すまひ高からす木立もをかしき山有、里の人にとひければこれなん二村山なるよしいふ

玉くしけ二村山の松杉はまき絵にかけるものと社見れ  
赤坂御油の駅を過て吉田の駅にやとりとす

廿一日やとりを立出て二川といふ馬屋にいたりぬれと尚夜ふかし、白須賀の駅にわたり漸あけほのなり

沖つ浪音もきこえてあくるよの空もほのくしらすかの里  
本しらすかといふ所より富士の山見ゆとかねてき、伝へ待れとけふは霧ふかく立こめて見えす葭野新田といふ所を行は左のかたに高師山あり、ふもとは海ちかくよする波の音おとろくしく聞ゆ

ふもとにはよせくる浪の音をへて声も高しの山のまつかせ  
橋本むらといふ里あり此里の左のかたに湖ありて海になかいたる、むかし此川にかけわたせるはしを浜名の橋といへるよし伝へり、よて橋本村と名付たるなりけり

打わたすはしいつかしら波のよするはまの浜路を□行  
これより荒居の駅の入口のつらに閑あり、そこにては輿の戸を

ひらき乗馬の跡つけといふものを閑に持ゆけは閑もりのものとほるへしとこたふ、それより海のつら一里のほとを船にてわたる、海のないぬ亥のかたと覚えて不二の山そひえ出てかすかに見えたり

さやかには見まれ見すまれ海こしに先めつらしく向ふふしのね

ほとなく舟つきければ舞坂といふ駅を経てさくを過行は浜松の馬屋にいたりぬ、申刻はかりなればこゝにやとりをした、めて諏訪と五社との大神にまうて、此神つかさともよりあひしれる人に侍りければ信郷も立よりぬ、やつかれも立よりてしはし物かたりなとして五社太神にまうす

こゝにしもあふくも高したかくらの三笠の森をうつす宮居を

次に諏訪の太神にまうて、

しなのなるすはの水うみせきわけていく世かあふく深き恵み

さてやとりに立かへり侍りぬ

廿二日浜松を立出て天竜川といふ川を船にてわたりぬ、此川水諏訪の湖より流れ出るよしにてよに大川なるにけふはおもひの

ほかに水のなかれもあさく待るといふ、すはのうみやいかにこ  
ほりてこの河の水さへ浅く成にけんとはおのつから哥のやうな  
るはとて笑ふ、池田の宿にいたりぬ、かのことわざにいへる湯  
屋てふ女のあと有やと人してとはすれば今に残り待るといふ

しら雪のふりにし跡と聞からにしらぬ人しもゆかしかりけり  
長森村といふを過て天満宮の社有、やすらふほとにまうつ、□  
塩松むらといふ里のほとりに今の浦てふ池有といふ、見附の国  
府のあなた袋井の駅にひるの物くふ、掛川より日坂を過て佐<sup>ササノ</sup>萱  
中山をはこえゆく、坂道雲霧ふかくたちこめて小雨ふる

遠こちの峯もふもとも雲とちてさやかにも見すさやの中山  
金屋の駅より大井川にいたればこしを台にのせてかきてわたり  
ぬ、水すくなく見え侍れと猶はやし、いとくひろき川にて水  
おほきころなんおもひやらる

都辺にき、つるよりも大井川わたるや幾瀬数もしらなみ  
申刻はかり雨いたうふり出ければ

さらてたにしほれ来にける旅衣袂とほりて雨そふりそふ  
嶋田の馬屋にやとりを求めぬ

廿三日寅刻はかり立出て藤枝より岡部の駅を経て宇都の山をこ  
ゆ、麓の里にいたりければ家ことにちいさき玉のことき物をぬ

きてかけたるを何そと問はこれなんうつの山の十団子といふも  
のそといへり、誠にさきの岡部の駅を過る時旅人のもたるはい  
へつとにするならんとおほゆ

宇都の山ふもとの里につらぬくは玉の岡部【の】(に)か  
へるいへつと

丸子より府中の国府にいたる間安部川といふ川をわたりぬ、そ  
の川の左のかたを見やれば森有、木枯の森なりとをしへ侍れば  
秋の色ははらひつくして松に吹こゑも寒けきこからしの森  
又国府のかたに雲のかゝりたる山をしつはた山といへるとなん  
いふ

たけはつち神の織けんしつはたのそれかあらぬか峯のしら雲  
狐か崎といふ所を過行に梶原てふものゝふの塚ありと人のをし  
へて侍れば世人のよくしり侍るものゝふにて駿河国にてうたれ  
しと聞ゆるはこのほりとなるにやとおもひあはせらる、江尻の  
駅より奥津にいたらんとするこなた清見寺といふ寺あり、此寺  
清見の関の跡なるよし人のいふ

駒とめていさ見てゆかん清見かたなみの関もり名に立るあと  
日もくれにければ奥津の駅にやとりてこ、もおなし庵か崎也、  
このやとり海ちかく誠に浪まくらひ、きていをぬぬま、に千鳥

のなくを聞て

夜もすからやとるもかりの庵か崎に千鳥の声そ聞あかしける  
廿四日夜をかけてたち出つ

月もさえ霜もおきつの浦つたひ袖にこほれる在明の影  
ほらといふ所より□にさかしき坂こえ過て寺尾邑といふ里あり、  
その右のかたこそ田子の浦なりといふ、むかしはこの山の岸  
のしたなる所に道ありければ此ふもとを過て不尽の嶺を見たる  
さま昔の人の打出て見れはとよめる杜誠に今はたいはむ言の葉  
もなし、由井川蒲原を経て富士川船にてわたりぬ、目くるめく  
はかりはやし

ふし川や瀬々にみなきる岩波はおなし高ねの雪のちるか  
と吉原の駅を過て大野新田といふ所にいたればふしの山裾野まで  
見わたさるゝさまは中／＼口つくまれ【て】侍る、さるを拙な  
きものゝくせとてわたししかたけれ

雲もみなふもとをわたる不尽の嶺いつこの雪かふり積りけ  
ん

信郷より不二の哥おくられければたはふれにのみてつかはしたり  
しはえかきもとゝめすすれにけり、四つ屋柏原といふ里にいた  
りければ浮嶋とてこれも又おもしろし、三嶋の駅にやとりぬ

廿五日やとりを出て三嶋の社を鳥居のこなたより拝み奉り箱根  
山の関過て

夜のほとはおほつかなしと箱根山明ては行と雲そをくらさ  
坂路の雪こほりてなめらかなれはゆきゝの人あるはまろひふせ  
りなとしつゝいとあやうし、湖水こそいとおもひもかけぬ雲の  
中にてみれ、小田原の駅に夕つかたつきぬ

廿六日例のほとに立出て山王原といふ松原を行は右のかたに海  
見ゆ、このほとりこよろきの磯なり

東路にありと聞こしこよろきのいその波をも袖にかけける  
大磯に社このこよろきのいそはありけれ、曾我の何かしかおよ  
のあた討しことのちの世にいへるをおもひ出で

ますらをのたけきその名は大磯のなみ／＼ならぬことをし  
そおもふ

酒匂川といふおほきなる川を渡り前川といふ里を過、花みつの  
橋とてわたりぬ

春はまたたちかへりきてわたるまし井手こす波の花水のはし  
平塚の駅を過行は南湖邑といふ里あり、そこなる茶店にてやす  
らふと見れば屏風から哥をからめけるさまにかきたるをある  
しに間は十六はかりの子らか書つとこたふ、それに流江亭とし

るせり、信郷唐哥作りとらせんといひければおのれも哥よみて  
あたふ、そのおや甚に悦ひ侍りぬ

東路や入江におふるよしあしはしらねときよき水茎の跡

藤沢戸塚の馬屋をへて程ヶ谷の馬屋にやとりぬ

廿七日はとかやのやとりを立出て神無川の駄を経て子やす村と  
いふさとを過行は海原きり立こめて漕ゆくふねの行方も見え侍  
らす、河崎より品川にいたるほと雪いたうふり出て人くゆき  
なやみぬ、申刻はかり江戸にいたりて石町といふ所にやとり求  
め置て入侍りぬ  
大みそかに春立ぬると聞て

としきはるけふしも春といふことは吾妻なればやまたき立  
らん

元日により侍る

武蔵野の行末遠き春にあひて老ぬる身をも先いはひけり

正月十五日大將軍の君にまみえ奉んと大城にまうて、松に雪の  
つもりたるをゑかき侍る間に着侍りて

此とのに幾としふるや春も尚雪を姿の千世の松か枝

十九日又大城にまうつ、本つ国にまかりなんことを申す、御服  
一重恵ませ給ふ

故郷にかけてかへらん武蔵野の露浅からぬ君の恵みを

廿六日御代々吾太神にをさめ奉り給ふ神田の御しるし文を改め  
られければ信郷をいさなひそのつかさ戸田家にまうて、あらた  
められ畢

廿八日曙に江戸石町のやとりを立出つ、品川の駄を経てうみを  
見やりて

ふるとしの雪けの雲をたちかへて春にかすめる波の長閑さ  
すへて海山のけしき冬にはいとまさりたればこ、かしこにて哥  
よみ侍れとかへるさ心いそかれしま、読すて、かきとめ侍らし  
同十一年

三月於当家親臣催稽古会兼題二首当座一首

籬款冬

人とはぬ花の笹よ山吹はいはぬ色とや心へたつる

松上藤

春幾世松にかゝりて咲藤の花もときはの色と杜みれ

夕鶯

梅かえにねくら求むるうくひすの声さへ匂ふ春の夕昏

於松尾日向亭稽古会二首并当座一首

待郭公

ゆふかけて猶や待らんほと、きす松尾山の夜半のいこゑ

海眺望

見るか内に浦漕ふねの沖津風追手待えて遠さかりゆく

夕蛙

暮ふかき池の汀にとろえてあまたかはつのすたくこゑく

五月於松本和泉守亭稽古会并当座二首

水辺蛩

谷ふかく何をおもひのかけならん三草かくれにすかるほたるは

窓前竹

窓近くそよ吹入て涼しさは夏もよそなる風の笹竹

菖蒲

こと草も同じしみとりの池水にけふはあやめをわけて引まし

嶋鶴

きてみよと誰も松風声そへてたみの、嶋に田鶴の鳴らん

古松

夏木立おなしみとりも年ことにふりそふ松はかけそ涼しさ

或依勸当座二首

早苗

注連はふるみとしろ小田に夕かけてさなへとりく祝ふ八乙女

故郷廬橘

住すてし里の軒端も立花はむかしかはらぬ袖の香そする

六月廿二日保田内匠頭藤原忠辰朝臣一周忌為追孝大膳権亮

勸進

夏懷旧

ふりにけり去年のかたみの夏衣ひとへにしたふ袖はしほれぬ

於祓川佐渡守亭稽古会二首当座三首

夏月涼

月の夜は端居なからに待いて、袖にかさぬる影の涼しさ

旅行友

おもふとちかたらひきぬる旅衣はるけき道のうきも忘れて

鶯

いとはやも春を告来て鶯の花にさきたつこゑそ匂へる

扇

宿にむかふ森よりもけにかよひきて扇にやとる風の涼しさ

書

そのかみをあふくも高き日本書紀教正しき道をしるして

七月七日於竈家信郷応勸

星夕言志

神代より絶ぬ契りの星合はとしに一夜も秋や幾秋

於羽倉撰津守亭稽古会二首并当座二首

女郎花露

草枕たかわかれにや女郎花おもひ乱れて露けかるらん

河水流清

立よりて心の塵もきよめまく清瀧川のなかれにそおもふ

初秋雲

天津風音もさやかに吹わけて秋や立らん雲のかよひち

野鳴

暮ふかき野沢の水に鳴しきのさひしさこめて立る秋霧

於松本筑後守亭稽古会二首当座二首

霧間鴈

落墨にかく玉章と見るか内に猶霧こめて過るかりか音

夜深待月

待ふくる空に光りを先見せて出るはおそき山端の月

郭公迷

聞も尚おほつかなしや奥ふかくたつきもしらぬ山ほとゝさす

新秋露

草木にはまたそれとなき秋の色を先置そむる露に杜しれ

九月十三夜従信郷之許得題

河月似氷

澄わたる月には浪もこほるやと見る影さむき秋の河風

於羽倉伯耆守亭稽古会并当座一首

菊

去年見てし花よりも又咲そひて盛久しき宿のしら菊

旅宿

故郷をおもふもかりのさゝ枕ひとよふたよも旅そ物うき

巳年の暮の哥

つかへこし身のしるしにはいなり山いやとし高くそへて暮行

同十二年壬午

元日口号

年もけふあらたまり来ていつよりもわきてそいはふ春にあひぬる

正月廿八日冷泉家稽古始

迎春祝道

幾めぐり昔の春のたちかへる道はつきせぬやまと言の葉

非蔵人岩橋出羽六十賀応勸進

但龍龜十二首之内

雪

咲と見てかさゝは老もかくるらんふるしら雪の花の梅かえ

非藏人赤塚丹後七十賀正補応勸進

竹為友

赤塚本郷深草也寄之

幾千世も竹の葉山の陰しめてともになれ見よ深草の里

御室宮之河崎洞鶴八十賀応祐之勸進

寄鶴祝

末遠き老を友とや幾千世もなれてきぬらん鶴の毛衣

於毛利豊後守亭稽古会

杜頭花

此宿にめつるも久し神垣の恵みへたてぬ花の盛を

五月九日当祖父幸親五十回為霊祭供進述懷旧之意趣聊詠夏

十首哥

薄暮卯花

跡をとふ山路そたとる卯の花のまた暮あへぬ光りなからに

曉更蘆橘

見し夢の昔をこふる曉に哀をそへてかはるたち花

古池菖蒲

おもふそよたれ引そめしあやめ草世々ふる池のけふのむかしを

遠山郭公

鳴て行遠の山辺の時鳥さくもかひなき今のこゑ

風前夏草

手向けんとはらはて残す夏草の花な乱しそ庭の朝風

雨後夏月

ふりし世をしたふ涙に五月雨ははれても月のかけそくもれる

処々照射

小男鹿のおもひや秋に増るらん峯にも尾にもとしさすよは

家々納涼

誰宿も涼しさならず此夕昔をしのふ袖は露けし

蟬声夏深

夏もや、暮行森の木隠にあはれ深もせみぞ鳴なる

螢火秋近

秋ちかきおもひも見えて草の原かけもはかなく螢飛かふ

五月十日野村勘解由源保尹十三回忌によみ侍る

なき人のわすれかたみの夏衣ひとへにしたふ袖は露けし

六月廿日武田前主殿助入道徹叟三回忌追悼細川長門常芳勸

進飛鳥井家出題

夏懷旧

世の中は夕立雲よときの間にみとせふりきて袖をぬらしつ

親臣賀予耳順年而以勸進之題請自詠応其請哥二首

冷泉家出題

鶴契齡

若の浦や松のこかけに老の浪よせて契らん千世の友鶴

寄竹祝

笹竹の林をしけみ置露の玉やひろはん千世の枝々

親臣

久かたの天飛鶴のよはひもてちとせを契る老の行すゑ  
陰しめて千世もと契る老の身の行末いはふやとの呉竹

親業

所えてこゝに來なるゝ蘆田鶴に契る齡は千世もつきせし  
未なかり千世の根さしのくれ竹に老のよはひを尚契るらん

杖の哥

親臣

いなり山代々をこめつゝつく杖は千とせの坂もやすくこえなん

吉見伊豆菅原正名六十賀永叔勸進

十二首組題巻頭

霞

山はまつ松のみとりを立こめて霞そ千世の春の初しは

於毛利豊後守亭稽古会当座二首

花

さそひこしけふの色香の春の友老もわするゝ花の木本

郭公

稲荷やますめは杜間ほとゝきす杉のあみ戸の明暮の声

毛利家姉幸子七十賀公林勸進

松樹契久

飛鳥井家出題

馴て見る軒端の松は老の友尚かそへみん千世の行末

藤野井遠江春原成允六十賀具成勸進

飛鳥井家出題

庭松契久

六十へし尚すゑ遠くとかへりの花も待見よ庭の松かえ

松本家尊母七十賀高任宿禰勸進

冷泉家出題

竹久緑

明暮に馴見ん老の千世の友窓に葉かへぬ竹のみどりは

稽古会

五月雨晴

五月雨に重なる雲の峯はれて先めつらしく向ふ月影

水辺納涼

音羽川音さへ涼し瀧津瀬のきよきなかれは又もとひ□<sup>(二カ)</sup>ん

六月廿二日保田前内匠頭忠辰朝臣三回忌大膳権亮勸進三十

壹首組題卷頭哥置頭す字

初春霞

す糸遠く霞へたてゝしたふかな三年ふりこし春の昔を

八月廿二日入江故三河守則明朝臣三回忌民部権少輔勸進

秋懷旧

三とせふる哀八月のかけなからその世をしのふ袖そしくるゝ

八月廿一日 天皇崩御之時雖恐奉歎之

作歌三首

なからへは又袖ぬらす雲よりおもひもあへぬ時雨ふりきて

陰ふかきなけ木の下は草葉までかはく間もなく露を置そふ

露けさは□人草の袖たにも常ならぬ世の秋にしほれぬ  
(音カ)

九月廿九日兄親安卿一周忌靈祭於安田家執行作懷旧歌五首

供進之

寄月懷旧

いとはやもめくり来にけり秋の空月にそしたふ去年の面かけ

寄露懷旧

一めくり秋のふり来てしら露のきえし跡とふ袖ぞしほるゝ

寄虫懷旧

虫の音も哀をそ【ゝふ】(へて) 草の原跡とふ去年の秋そかな

しき

寄涙懷旧

ほしあへぬ袖や朽けん程もなく秋をかさねてしたふ涙に

寄夢懷旧

さめてけふ尚社したへ一めくりふりこし秋や時の夢

十一月廿三日松本故上州為慶一周忌追悼親臣公林等勸進

冬懷旧

消し身の去年の名残の松の【雪】(霜) ふりこし陰の哀をそとふ

来正月十日松本古甲斐守為以一周忌追悼同勸進

閑居雪

先きえし友こそ雪に猶しのへさひしさそへてふり残る身は

来二月六日羽倉古出羽守信舎三回忌同勸進

春暁月

名残あれやみとせの春のおもかけもあくるほとなき月のよふかき

来末年十一月冷泉家始祖家長卿調御七百年追遠之歌予有出

題兼詠之

松頭千年瑞

つきせめやその世かはらぬ霜の松宿に千年のかけをふかけめて  
(ママ)

年内立春

けふは先霞の袖にとしふかき雪をかさねて春や立らん

午歳暮

何ことをまつとはなしにいなり山哀六十の年も【暮】(こゑ)行

同十三年未正月

歳旦

神垣に引しめ縄のかけまくもかしこみいはふ御代の初春

二月中旬宗匠家出六首之題使門人勸給時詠之

春

長閑さは人のこゝろも花鳥のあかぬ色香の春になりゆく

夏

いつしかとうつり来にけり夏衣花にいとひし風も待れて

秋

野をちかみ庭も籬も深草の花に昔の秋やしのはん

冬

冬寒きよるはすからに置霜を哀ねさめの袖にかさねん

恋

言にいて、いは、浅しとおもひ川心はふかくこひわたるとも

述懐

かひなしやぬさとり持て善悪を払へわきても改めぬ身は

右愚詠以詠草伺之于時為村卿書加尊詠給和歌

六根の清浄くは何かあしからんぬさ取持てはらへする身に

四月廿三日信名宿禰十三回追慕信郷勸進

夏懷旧

めぐりきて跡とふ宿のほとゝきす哀その世やしのひ音に鳴

夏枕

夢をさへ見はつる程もなつの夜や哀昔をしのふ枕に

五月江戸田安之学士岡部衛士賀茂真淵上京而未来戯作古風

贈之

我宿尔不来之人尔如此待登往而告社山霍公鳥

昔吾友賀茂真淵東より宮子にのほりて東丸おちのおきつき

にまうつ、ついてにはやくおちの住給ひし跡をなつかしみ

見入ければ、その家居もなくてむかしめなれし庭も籬もへ

たてなく、只夏草のみおひしけりて深草の野となりたる

さまを見て涙おとし侍りけると聞えければ、その夕つかた

よみ侍る

跡したふ人の涙をかけそへてわか袖までもいと、しほれぬ

故郷のこゝらのくさに置露は【路】(跡)とふ人のなみたなる

らし

ふり残る庭のをしへの言の葉そ涙の露の置ところなる

高祖父継長宿禰当今年十月廿六日一百五十回靈祭

六月廿六日  
取越執行

行親臣供進之歌勸進

披書知昔

見てそしたふも、とせあまりいそのかみふりしその世の水茎の跡

同供進之哥組題二十首内十首予詠之

早春鶯

廻りこし春の昔をおもひ出ていとはやきなく谷の鶯

松残雪

春に今しらぬ昔をしら雪の尚ふり残る松にしのはん

春田雨

春雨の晴間もまたて荒小田におり立しつの袖そしほる、

簷蘆橘

我宿に昔の人をしのへとや香に匂ふらん軒の立花

新秋露

置露は草葉のみかは秋きぬとわかころも手もしほれそめぬる

野外鹿

しのす、き穂にあらはれて妻こふる秋も末野の小男鹿の声

紅葉霜

秋ふかき深山はさそな染ぬらんまた霜浅き庭の紅葉は

浦千鳥

浦遠く塩のひかたの跡とめてこゑもかすかに千鳥鳴なり

忍待恋

槇の戸もこよひはさらてさ、かにのいと、待間も人めをそおもふ

山家夕

物おもふゆふへの空はかはらしなうき世のかれし山の奥にも

先考正三位今年六月廿七日当十三回靈祭供進之哥十首内五

首親臣詠進之

春草

ふり残る庭の園ふのくさはまてむかしわすれぬ春の露けさ

菖蒲

ふりし世をしのふ袂に引そへてけふはあやめの露やかさねん

山月

山端にしのは月のますか、みうつす昔の秋のおもかけ

暁雪

袖さえてふり行身にし今そしるおいのねさめの雪の暁

述懷

さめやらて猶こそしのへと、せあまり三とせふる間そ夢の内なる

同十四年 六月二日改元為明和

正月廿八日冷泉家稽古始

寄亀祝

此宿のいつみになれてすむかめは八百万代の春もかきらし

従冷泉家 稲荷社法楽和歌十首内応勸進歌

初春霞

春立はいなりの山のしるしとて峯の杉村まつかすみけり

明和元年七月廿一日 桃園天皇御三回忌奉遙拝乍恐謹而詠

懷旧之意

雲より三とせの秋のめぐり来てみかけをあふく文月の空

春日若宮古神主五十回追遠祐益卿勸進

秋懷旧

さしむかふ影そ露けき三笠山月にむかしの秋をしたへは

稲荷祠官秦氏等之始祖秦伊呂公今年明和元年八月八日当

一千歳靈祭之神事於三家三日執行之仍供進歌一百首内愚詠

二十首并加序

おほよそいにしへよりみかとおほん祭にあつかりたまふ御社のかんつかさは、もゝたらぬ八十氏人のなかにも、よしあるうち人をえらはれたまひて神ぬしにまれ禰宜はふりにまれその神

つかさに補なひつかふまつらしめ給へは、今にいたるまであたし氏はまちらひ仕ふまつらし、聞ならく吾始のおや秦伊呂具公は賀茂あかたぬしらかおなしみおやたけつみのみことの後よりいて、やまとねこあまつみしろとよくになり姫のすへらみことの天の下しろしめし、御世にみことのりをうけ給はりて、和銅四年二月のはしめの午の日をよき日とえらひて此いなり山の三の峯をすりところと定めて、三はしらの神たちを始めていはひまつりとしこひの祭につかふまつれり、このとし五つのたなつものをはしめ、草のかき葉にいたるまで風あらくひてり水あふりのわさはひなく、こかひのなりはひまでもさはりなし、ある御世にさいはひ給へはうちひさす都をはしめ、あまさかるひなにいたるまで吾おほん神のみうつくしみをかうむらさるものなく、四方の国く煙たちそひておはむたからあつく、富ひろくにきはひてみつきものところせきまでみちつみ侍りければ、すへらみことによりこはせ給ひ、いにしへもろこしよりまうおもむき侍りしはた氏らかみつき奉りてみかとに見てつみまつりけるときこしめす御世のことく、天のしたおほいにきはひはへりけるとなん伊呂具公のいさをしをほめさせ給ひて、うちかはねを改めてはたのきみとたまはりぬ、そのうみのこら世々

をへてあるはいみきと給はり、あるはすくねと給はりて今にいたれり、此みたまのうつくしみをたふとみてとよいかしよのみたまとた、へまつりて年／＼八月八日にはひ祭りけり、爰に吾友為勝宿禰ちかおみ公林らのいへらく、以呂具のきみことしひとちとせにあたれりけり、いまの世にある人のとし月をかそへてふりし跡とふさまによりたれと、ことしは祭のしなもたえたるをおこし、すたれたるをもをきなひ、そのいやおこそかにつかふまつらまほし、また遠を、ひしらぬ昔をもしたふこと、そのほと／＼にしたかひ心さしをいひのへんにみやひあらんことはやまと哥にしくものはあらしとなん、さるへきも、くさの題をさくり求□て、たくみつたなきをえ□はすわう氏のやからのみたかひにす、め侍らんと、やつかれもつねにたくみほ□□みけるとてみつからのをも□みてまつれまた此祭のをもむ□をも哥のはしにするすへきよしなんありける、かゝる心さしをしゐていなむへきことにしもあらず、ともにみおやのうつくしみをあふき、おほんめくみにもむくひまつらまほしくつたなき言の葉つゝりても、くさの中にくはへ侍りぬ、しかあれはをのれらかほと／＼よみて奉りけるありさまを、神ながら平らけくしろしめして山よりもたかきみうつくしみ海よりもふかきおほ

んめくみをたれ給ひ幸ひ給は、氏の人／＼いかしやろはへのことく、呉竹のよゝたちさかへ、御祭り山下水のたえすうみのこの八十つきにいたるまでまさきのかつら万代かけていはひまつらんものなりとはたの親盛かしこみてしるし侍る

#### 立春

久かたの雲ゐはるかに幾めぐり千年ふりこし春や立らん

#### 残雪

いなり山かすむやいつこしら雪のまた消あへぬ杉の下かけ

#### 春雨

春雨にふりしその世をしのふかな草のかきはもれぬ恵みに

#### 菫菜

春幾世ふる野のすみれ摘はやなけふの昔の忘れかたみに

#### 更衣

卯の花の垣根もけふはしらかさね先咲そめて夏やきぬらん

#### 早苗

しつの男か千町のさなへとり／＼にきはふ秋もかねてしらるゝ

#### 蚊遣火

山もとのかやりのけふり立ぞひていとゝふるやの軒ぞふすふる

#### 七夕

いとはやもおほゆる秋を織女は程しも遠く待やわふらん

荊萱

秋風の吹としもなき野へことにたかかるかやそおもひ乱る、

露

ふりにけり軒端わすれす秋ことにその世しのふの露そこほる、

擣衣

深草や露ふき払ふ秋風にたくふきぬたの音も身にしむ

霰

風をあらみあられの玉のたま／＼もたまらは袖に包みても見ん

寒蘆

三嶋江の見しにもあらず冬枯て蘆間あらはに霜や置らん

神楽

かしこしなうたふ庭火の声ふけて天の岩戸の昔をそ思ふ

初恋

行末はとまれかくまれ思ひ人心にまかす恋の山みち

遇不逢恋

つれなさのわかれを月におもひ出て今はたしのふ在明の空

暁

たかために秋のねさめを慰めてあかつき近く鳥の鳴らん

山

尋常に見れば社あれ九重の都の四方の遠こちの山

海路

須磨あかし浦のなめはこゝなれや誰も心をよする友船

懷旧

そのかみをあふくも高き稲荷山幾世を杉の陰もふりきて

明和式年

稲荷社月次奉納之歌從正月十二日到四月十二日之間依姉之

服中延引服闋而祓補詠之

正月分

初春祝

神垣に御代を祈りてあら玉のとしのを長く祝ふ初春

二月分

春月

稲荷山かすめる春の月かけもおほろけならぬあけの神かき

三月分

社頭花

いなり山あかすと神もみつ垣の盛久しき花のしらゆふ

四月分

蘆橘

いなり山更に昔をしのへとて杉の木陰にかはる立はな

保田大膳権助実母十七回忌勧進

若菜

さそなおもふ河辺に若菜つみつゝもかへらぬ水の哀むかしを

稽古会兼題二首当座一首

海辺郭公

浪の間も聞はもらさし時鳥幾よあかしの浦に待れて

瞿麦露

わかれうき誰とこなつの花にけさよふかき露の置乱るらん

田里煙

としことに田つらの里はにきはひてゆたかなる世そ煙立そふ

当社奉納五月分

郭公

ゆふかけて聞は夜ふかく時鳥いなりの山の月に鳴なり

八月廿九日冷泉故大納言為久卿二十五回忌追慕為村卿勧進

寄虫懷旧

ふり残る身はいつまでそ鈴虫のその世の秋を猶もしたひて

当社奉納六月分

樹陰納涼

稲荷山木かけ涼しくすきかてにしるもしらぬも立そ休ふ

同七月分

萩風告秋

いなり山いつしか夏もすきの戸の軒端(つぐ)の萩にそよく秋風

同八月分

月前鹿〔歌ナシ・ママ〕

明和二年八月上七社に御祈の事ありて、稲荷社にてはやつ

かれに仰ありければ、かしこみて八月廿四日より同三十日

に至り一七ケ日の間つかふまつりてよみ侍る八首

み祈のみことかしこみぬさとりて先我身をそ祓へ清まる

大君のみことかしこみ朝氣よりゆふへをかけてみそきをそする

祈らはや稲荷の山のいや高にさかえん君の万代の秋

さかゆかん御世をそ祈るいなり山杉のみとりのときはかきはに

いなり山うき世の民を清めんと瀧津流れにみそきせしかも

かしこしな青人草も霧ふかき君の恵みにもれぬ御祈

なへて世を祈るまに／＼照そふる光をあふけみつのともし火

稲荷やまみことかしこみ祈るてふ日かすもけふにみつの神垣

当社奉納九月分

紅葉色々

神もさそ心をそめてみつかきやこきも薄きましましる紅葉は

九月十四日旧友橋本越後橋堯常問来一宿于時公林親業等探

出十首題催歌予詠三首

月前虫

ふりし身の秋の哀をなくさめて月に鳴らし鈴虫の声

月前鹿

おもふとち昔をしたふ月影に哀をそへて鹿そなくなる

月前祝

幾めぐり世は長月の秋ことにくもらぬ影を尚もあふかん

菊花詠十一首

打なひく菊の色の朝風に心やくたく花の上の露

いつれをとわきてやめてん園の菊色香あらそふ花の盛は

見せはやと移し植ねと咲菊の花のさかりは友ぞ待る、

置霜も猶しら菊の籬にはうつろひかはる花も見えなく

花を見まほしとて人の問来ければ

匂はすは人しもしらて過ぬへし菊の花咲庭のあき風

菊花の色をわかちてよめと人のいひければ

いはんすへしらぬ宿には【咲】きく【も】(の花)くちなし色

に咲匂ふらし

秋ふかき梢の色におくれしと先咲けらし菊のくれなゐ

いもか蒔しゆかりとやみん咲きくの紫色に匂ふはつ花

秋もや、ふりなん霜の色を先まかきに見せてさけるしらきく

菊は花のいろいろいつれかと人いひければ

さま／＼の花のなかにもしら菊の色はさやかにわきて社みめ

当社奉納十月分

初冬時雨

秋ははやすきの木陰に冬きぬといなりの山そ間なく時雨る

非藏人秦重茂祖母十七回忌追悼勸進

冬懷旧

よ所なから袖をそぬらす神無月その世をしたふ宿の時雨に

於親業家稽古会当座

鹿

秋風のさそふやいつこよそにたに聞も寒けき小男鹿の声

落葉風

幾度か払ふ木の葉を更に又庭に吹しく風のわひしさ

篠霜

幾夜かも霜置そへて小笹原かれせぬ色も更に寒けし

当社奉納十一月分

神楽

いなり山猶もむかしにくりかへせかれぬさかきの本すゑの色

保田大膳権亮実父十七回忌追慕勸進

依風知梅

さそふ香におもひ出れはありし世に植けん宿の梅の春風

来戌年正月二日冷泉家為清朝臣当一百回忌為供進勸進也兼

詠之

春懷旧

此宿に春も、めくり咲梅の昔わすれぬ花の露けさ

当社奉納十二月分

雪中眺望

稲荷やますきの木陰に見わたせは峯にもをにも積るしら雪

【附記】本研究はJSPS 科研費15H03242の助成を受けたものである。なお資料の翻字にあたって東海大学非常勤講師早乙女牧人氏の協力を得た。ここに深謝申し上げる。

